HITOTSUBASHI UNIVERSITY

平成21年度

一橋大学 学生生活実態調査報告書

一橋大学 学生委員会

ま　え　が　き

平成21年度に本学で実施した「学生生活実態調査」の結果をとりまとめた報告書をお届けします。

全学規模で行われる「学生生活実態調査」は、平成17年度、平成19年度に引き続き、今回で3回目になりますが、平成17年度は学部生のみを対象としていたのに対して、平成19年度からは大学院生も対象としています。

この「学生生活実態調査」は、継続的に蓄積されていく統計的なデータをもとに、本学学生の生活状況を把握することにより、今後の学生支援のあり方を具体的に検討し、更なる支援の充実に資することを目的としております。今後も原則として隔年で実施していく予定です。

調査の趣旨を理解し回答に協力してくださった学生の皆さんに感謝します。

平成22年12月

一橋大学　学生委員会委員長

落合　一泰

CONTENTS

Ⅰ. 基本事項について …… 2

Ⅱ. 住居・通学について …… 3

Ⅲ. 入学について …… 5

Ⅳ. 学生生活について …… 7

Ⅴ. 進路・就職について …… 11

Ⅵ. 家庭の状況について …… 14

Ⅶ. 生活費の状況について …… 16

Ⅷ. アルバイトについて …… 18

Ⅸ. 経済支援について …… 20

Ⅹ. 心身の健康について …… 22

Ⅺ. 生活支援について …… 24

Ⅻ. 大学への要望について(質問項目) …… 26

XIII. 学生の声 …… 28

Ⅰ. 基本事項について

学生生活の実態を把握し、今後の学生支援のあり方を検討すべく、学部および大学院に在籍する学生（休学・留学中を除く）を対象に、平成21年11月から12月にかけて、『平成21年度学生生活実態調査』を実施しました。今回の調査は平成17年度、平成19年度に続き3度目となります。

回答を寄せてくれた学生は、学部生4,140人中547人（回収率13.2%）、大学院生1,468人中172人（回収率11.7%）で、全体では5,608人中719人（回収率12.8%）の学生から回答が得られました[図表 I-1]。これは前回調査（平成19年度）の回収率（学部生21.3%、大学院生28.8%、全体23.3%）と比べて大幅に減少しています。

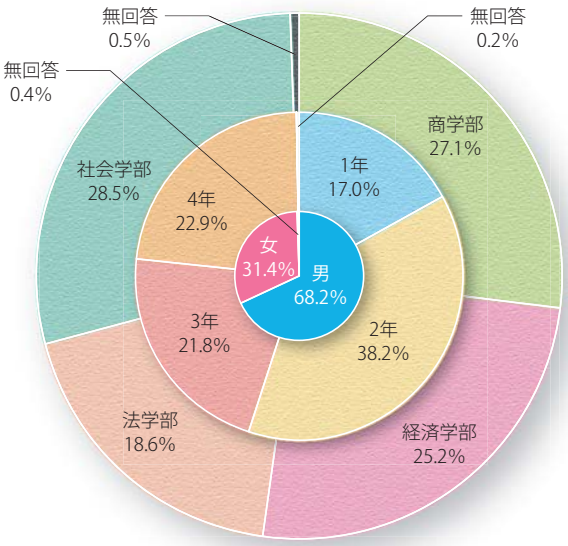
回答率が減少した理由については、学生からは設問が多すぎるとの意見も聞こえており、調査の方法や設問数、回収方法など、調査のありかたを見直す必要があると思われます。

図表 I -1　回収率

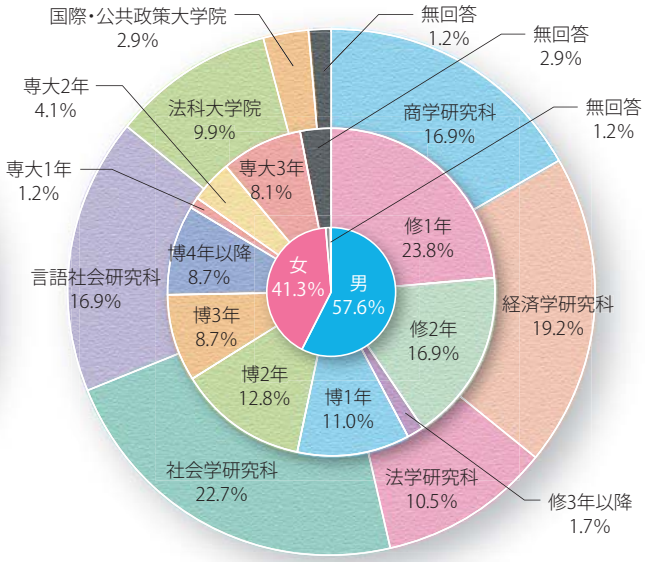
	対象総数	回収数	回収率
学部生	4,140 人	547 人	13.2%
大学院生	1,468 人	172 人	11.7%
全体（合計）	5,608 人	719 人	12.8%

2010 年2 月12 日現在

図表 I -2　回答学生の内訳（学部生）



図表 I -3　回答学生の内訳（大学院生）



国際企業戦略研究科 0%　　専大4年以降 0%

修：修士課程　　博：博士課程　　専大：専門職大学院

回答を寄せてくれた学生の内訳は[図表 I-2（学部生）]および[図表 I-3（大学院生）]のとおりです。

学部生については、4つの学部の間にあまり大きな差はありません。いずれの学部でも2年生が回答者の約4割を占めています。男女比では男性が約7割を占めておりますが、これは在籍学生の男女比（男子75%女子25%）とほぼ同じです。ちなみに外国人留学生は回答者全体の3%未満（学部生の在籍留学生の割合は約4%）です。

大学院生については、国際企業戦略研究科を除くすべての研究科と専門職大学院（法科大学院、国際・公共政策大学院）の学生から回答が得られました。対象者の数は研究科等によって大きく異なりますが、回答率に大きな違いはないので、本調査の結果が本学（国際企業戦略研究科を除く）大学院生の状況や意見をある程度反映しているとみてよいと思われます。また、学部生と異なり外国人留学生※1の回答率が高く（27.9%）、外国人留学生の状況や意見を知るための優れた資料になっていると言えるでしょう。

※1 この場合の「外国人留学生」とは、在留資格が「留学」であることです。

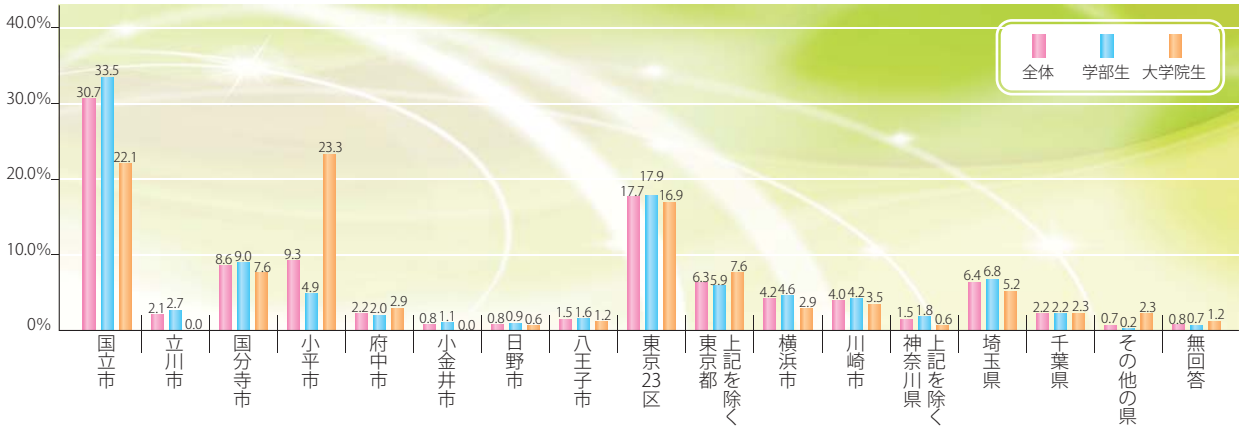
Ⅱ. 住居・通学について

住居に関しては、学部生の場合は自宅外が55.9%、自宅が43.3%となっているのに対して、大学院生は自宅外64.0%、自宅34.9%と自宅生の比率がより低いことがわかります。全体の比率では自宅外57.9%、自宅41.3%で、全体的にほぼ6割の学生が自宅外で暮らしているようです[図表 Ⅱ-2]。

居住地は国立市が最も多く30.7%を占めています（学部生33.5%、大学院生22.1%）。次に多いのは東京23区で17.7%（学部生17.9%、大学院生は16.9%）。これに小平市9.3%、国分寺市8.6%、埼玉県6.4%、その他の東京都6.3%、と続きます。特徴的なのは小平市に住む学生の比率で、学部生4.9%に対し大学院生23.3%と、大きな開きがあります。しかしこれらを含め国立市、小平市、国分寺市、立川市の総計が50.7%（学部生は50.1%、大学院生は53.0%）ですので、ほぼ半数の学生が大学近隣地域に居住していることがわかります[図表 Ⅱ-1]。

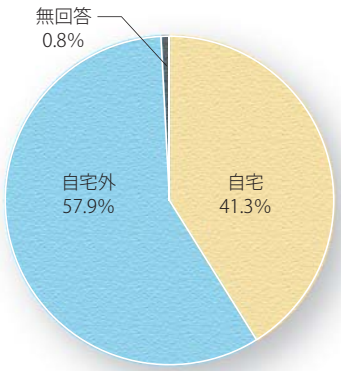
また、前回の調査と比較して、大学近隣地域に暮らす学生の比率が高くなっています。

図表Ⅱ-1　現在の住所（全体・学部生・大学院生）

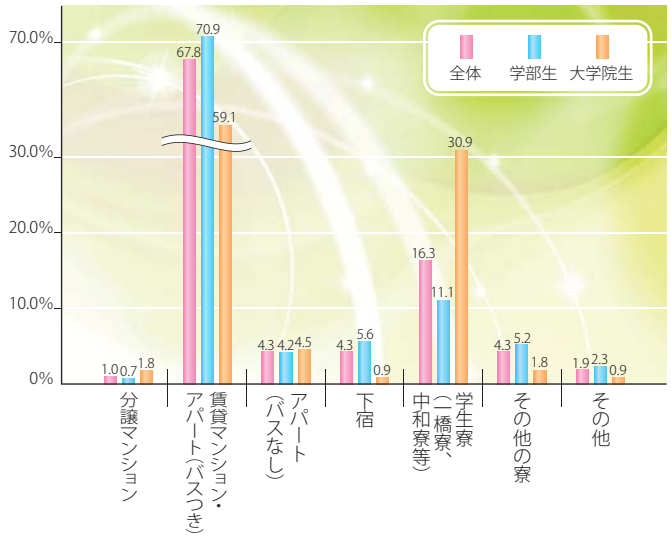


住居区分は学部生、大学院生共に賃貸マンション・アパート（バスつき）がもっとも多くなっています（学部生70.9%、大学院生59.1%）。学部生と大学院生の顕著な違いは学生寮の利用で、すべての寮をあわせると学部生16.3%に対し、大学院生32.7%と大きな違いが見られました[図表 Ⅱ-3]。

図表Ⅱ-2　住居形態（全体）



図表Ⅱ-3　住居区分（全体・学部生・大学院生）



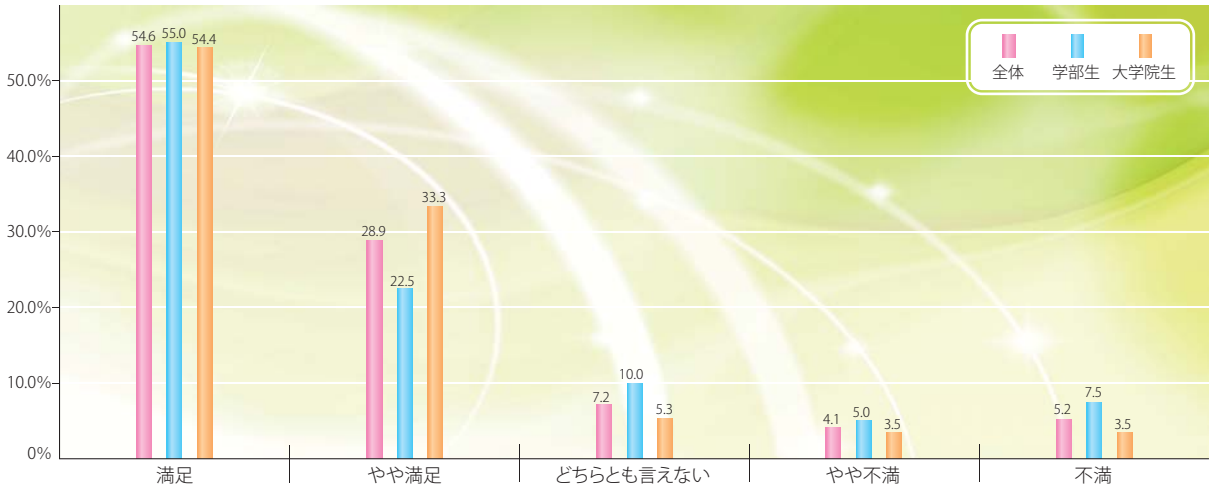
Ⅱ. 住居・通学について

学生寮に関しては、[入居済み・入居経験あり]が13.5%ですが、学部生が7.3%であるのに対し、大学院生は33.1%にのぼります。[入居経験はないが知っている]と答えた学生は75.9%(学部生82.6%、大学院生54.7%)で、ほぼ9割の学生が学生寮の存在を知っていることになります。留学生では学部生の4割、大学院生の7割近くが入居済み・入居経験者です。入居したくてもできなかった学生の割合も日本人学生より多くなっています。

学生寮を利用している学生に聞いた学生寮の満足度については、[満足]が54.6%、[やや満足]が28.9%で、8割以上の学生が満足しているようです[図表 Ⅱ-4]が、前回調査より満足度の割合はわずかに下がっています(平成19年度調査の「満足」「やや満足」の合計は83.8%)。それに対し、留学生の満足度は高く、ほぼ全員が[満足][やや満足]と答えています。

以上のことから、留学生にとって学生寮の存在がいかに重要であるかが改めて認識され、今後もその整備・拡充が望まれます。

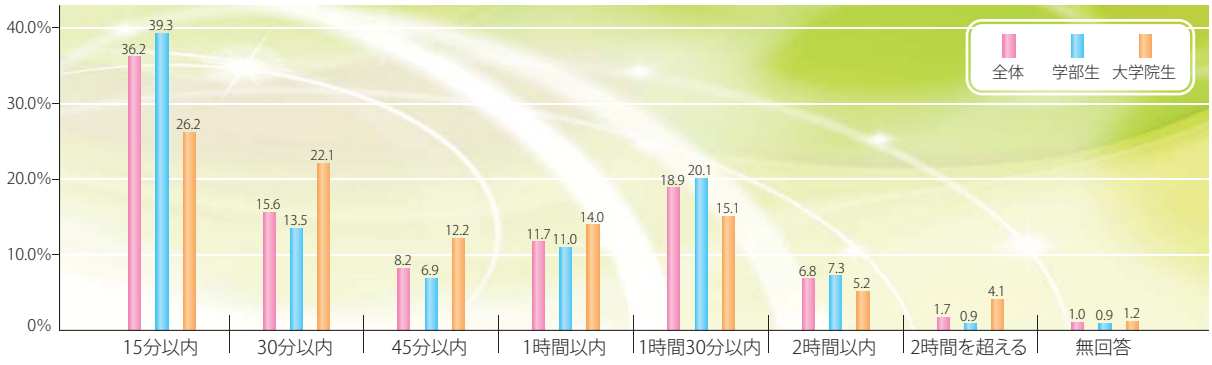
図表Ⅱ-4 学生寮の満足度(全体・学部生・大学院生)



通学時間は片道15分以内が最も多く36.2%(学部生39.3%、大学院生26.2%)、30分以内と合わせると51.8%(学部生52.8%、大学院生48.3%となり、ほぼ半数の学生が30分以内の、比較的大学に近い圏内に暮らしていることがわかります[図表 Ⅱ-5]。

通学に利用する交通機関は[電車]が最も多く50.1%(学部生49.4%、大学院生52.3%)で、次に[自転車]が40.8%(学部生42.6%、大学院生34.9%)であり、[徒歩のみ]が5.6%(学部生4.8%、大学院生8.1%)でした。バス、自家用車、バイクは合わせても全体の3%以下です。

図表Ⅱ-5 片道の通学所要時間(全体・学部生・大学院生)



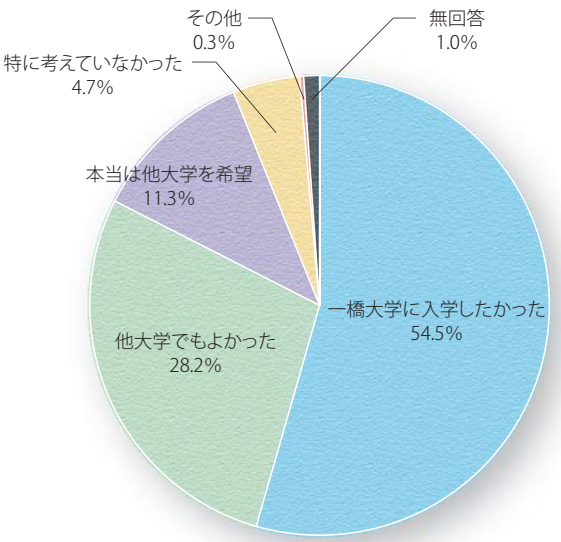
Ⅲ. 入学について

入学については、5割以上の学生が[一橋大学に入学したかった]と答えています(学部生52.1%、大学院生62.2%)。希望の度合いについて、[本当は他大学を希望]と答えた学生を見ると、学部生が13.7%、大学院生が3.5%で、大学院生の方がより明確な目的意識を持って一橋大学を選択したことがわかります[図表 Ⅲ-1]。

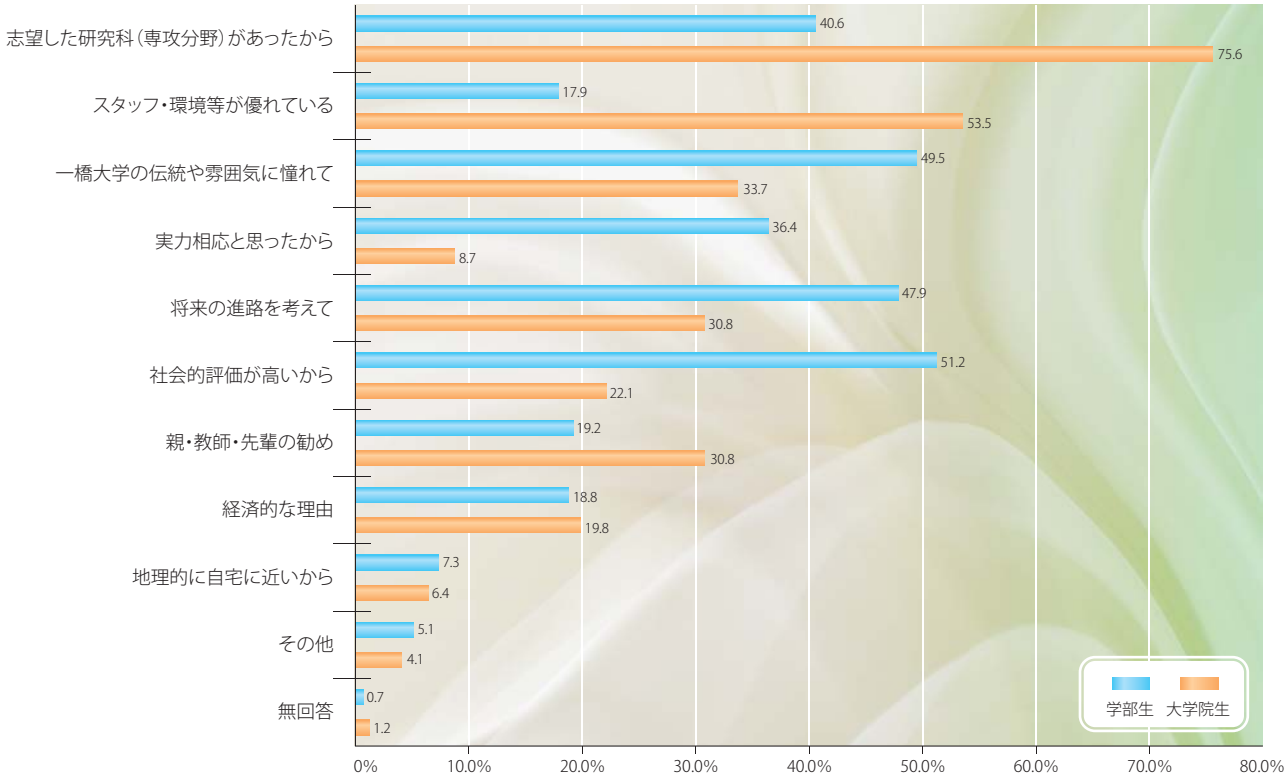
入学志望動機に関し詳しくみてみましょう[図表Ⅲ-2]。[志望した研究科(専攻分野)があったから]を選択したのは学部生40.6%に対して大学院生75.6%、[スタッフ・環境が優れている]を選択したのは学部生17.9%に対して大学院生53.5%と大学院生のほうが非常に多く、逆に[実力相応だと思ったから]を選択したのは学部生が36.4%、大学院生が8.7%、[社会的評価が高いから]を選択したのは学部生51.2%に対して大学院生22.1%と、学部生の方が非常に多くなっています。

これらのことからも、大学院生の方がより明確な目的を持って一橋大学を選択したということが言えるでしょう。

図表Ⅲ-1 一橋大学・大学院の希望の度合い(全体)



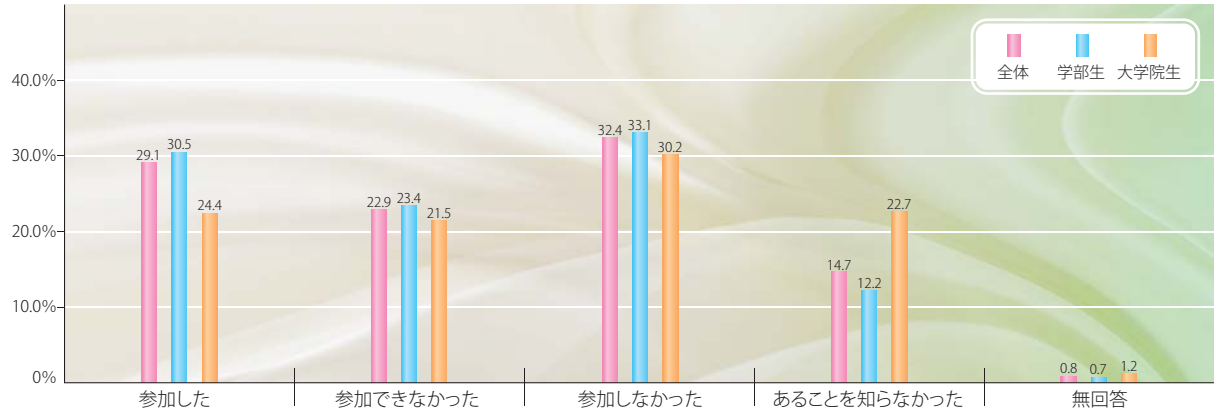
図表Ⅲ-2 一橋大学・大学院への入学志望動機／主なもの3つ(学部生・大学院生)



Ⅲ. 入学について

全体で約3割の学生がオープンキャンパス・入試説明会に参加しています[図表 Ⅲ-3]。[参加できなかった][参加しなかった]と答えた学生は学部生・大学院生共に約5割を占めています。[あることを知らなかった]学生をみると、学部生は12.2%ですが、大学院生は22.7%にのぼり、特に他大学に対し大学院入試説明会等の案内を広めるなどの改善が必要かと思われます。

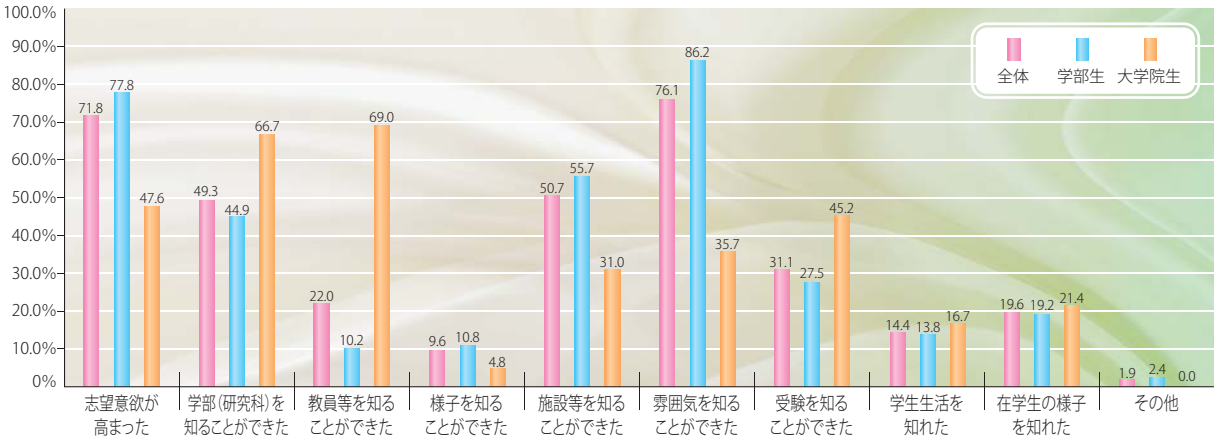
図表Ⅲ-3 オープンキャンパス・説明会への参加の有無(全体・学部生・大学院生)



オープンキャンパス等に参加して役立ったことについては、学部生と大学院生で違いがあります[図表 Ⅲ-4]。学部生は[雰囲気を知ることができた]が一番多く(86.2%)、次いで[志望意欲が高まった](77.8%)、[施設等を知ることができた](55.7%)であるのに対し、大学院生は[教員等を知ることができた]が一番多く(69.0%)、次いで[学部(研究科)を知ることができた](66.7%)、[志望意欲が高まった](47.6%)となっています。

これらのことから、学部生がオープンキャンパス等を通じて一橋大学の雰囲気や施設を知ることで入学志望意欲を高めたのに対し、大学院生はオープンキャンパス(入試説明会)を通してより具体的な教員や研究科の内容を知ることで入学志望意欲を高めたということがわかります。

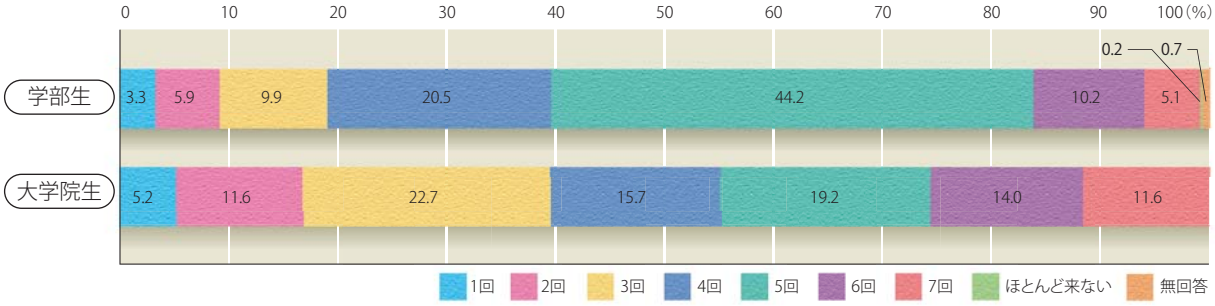
図表Ⅲ-4 オープンキャンパス等へ参加して役立ったこと/該当するものすべて(全体・学部生・大学院生)



Ⅳ. 学生生活について

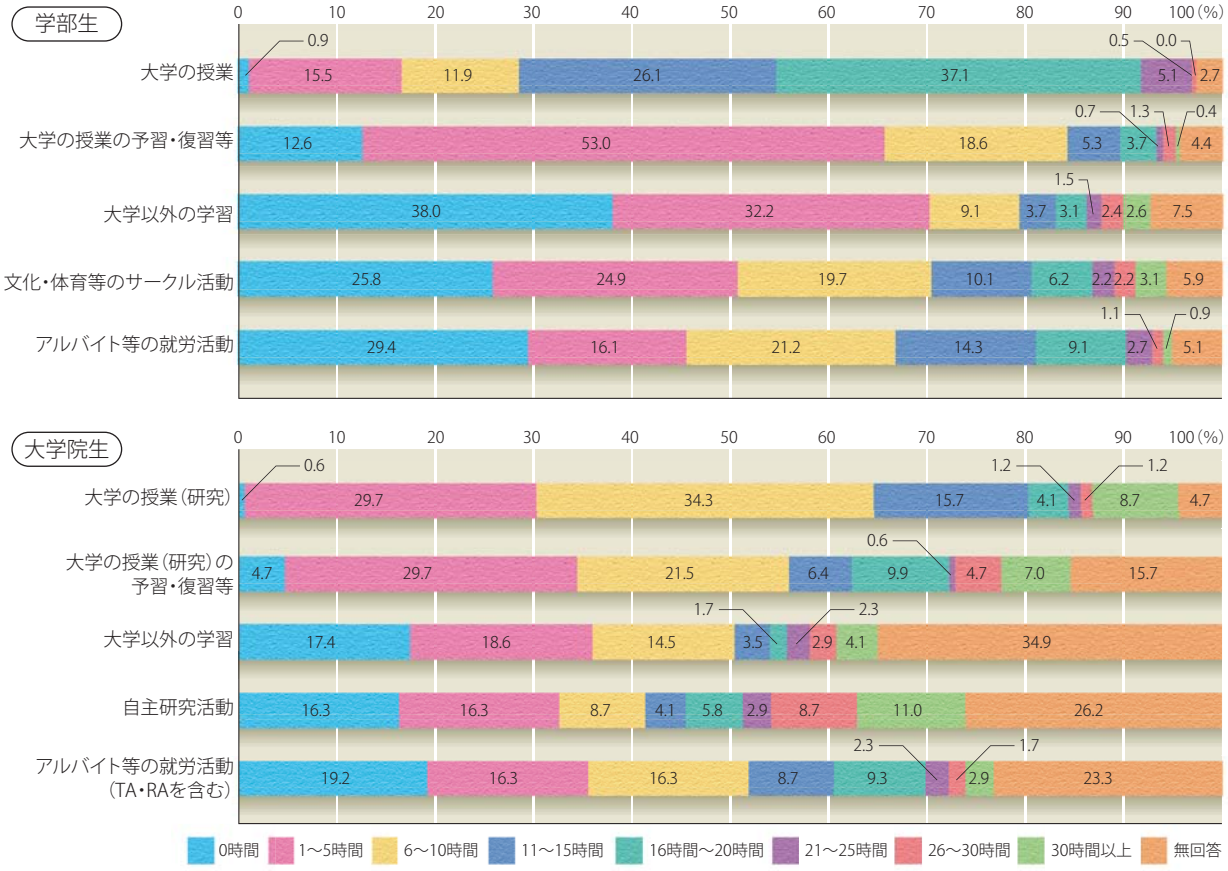
一週間に大学に来る回数は、学部生は4回・5回が合わせて6割以上をしめ、平日はほぼ毎日学校に来ていることがわかります。大学院生の場合はばらつきがあります。大学院生の場合、図書館や院生研究室等の学内施設に通って研究活動をする学生と、自宅など他の場所で研究を行う学生に大きく分かれるためと思われます［図表 Ⅳ-1］。

図表Ⅳ-1 一週間の平均通学回数（学部生・大学院生）



一週間あたりの生活時間の使い方では、学部生と大学院生でかなりの違いが見られます［図表 Ⅳ-2］。学部生は大学の授業に11時間以上かけている学生が7割近くいるのに対して、大学院生は6割以上が10時間以下と答え、大学の授業（研究）よりも自主研究活動に多くの時間を使っていることがわかります。大学以外の学習についても、学部生は7割が5時間以下と答えたのに対し、大学院生で5時間以下と答えたのは約3割にすぎません。

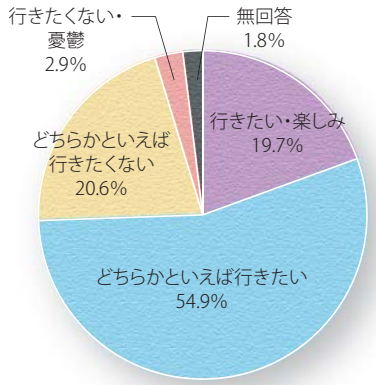
図表Ⅳ-2 一週間あたりの生活時間について（学部生・大学院生）



Ⅳ. 学生生活について

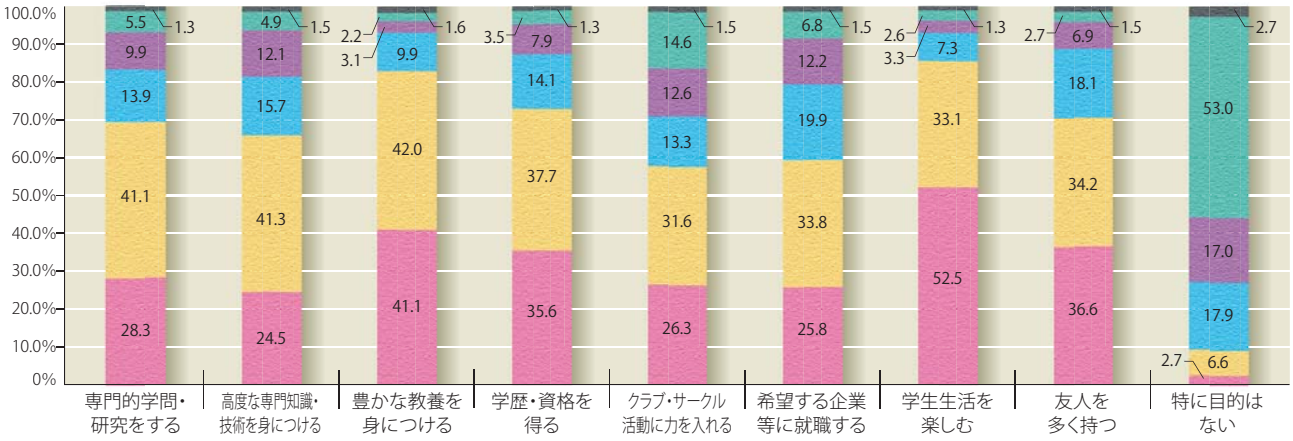
学生は大学生活をどのように感じているのでしょうか[図表 Ⅳ-3]。全体で7割以上の学生が大学に対して[行きたい・楽しみ][どちらかといえば行きたい]と答えています(学部生72.8%、大学院生80.0%)。しかしその一方で[どちらかといえば行きたくない][行きたくない・憂鬱]と答えた学生も、学部生で26.1%、大学院生で15.1%おり、学部生の4分の1が大学生活になんらかの問題を抱えている可能性があることがことがわかります。こうした学生の存在に注意を払うことが今後も重要と思われます。

図表Ⅳ-3 日頃大学に行くときの感じ(全体)

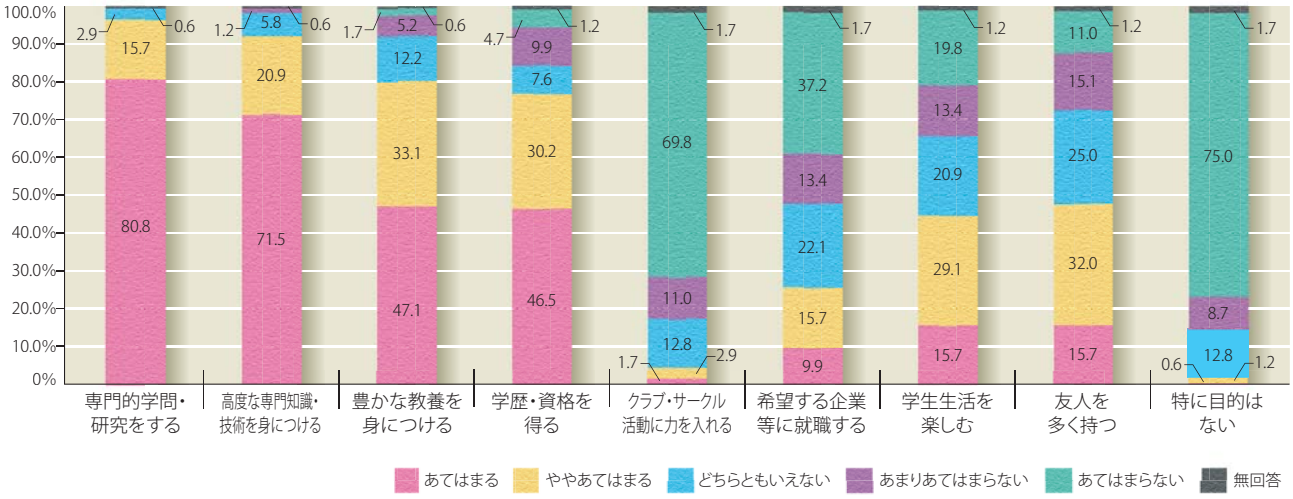


大学生活の目的としては、学部生の8割以上が[学生生活を楽しむ]、[豊かな教養を身につける]に対し「あてはまる」「ややあてはまる」と回答しています[図表 Ⅳ-4]。次いで[学歴・資格を得る][友人を多くもつ][専門的学問・研究をする]の順となっています。専門的なスキルのみに偏らない広い教養を見につける場を充実させることも大学の役割として重要と思われます。一方、大学院生の場合は[専門的学問・研究をする]と[高度な専門知識・技術を身につける]の二つが突出しており[図表 Ⅳ-5]、専門研究主体の大学院生の意識がよくわかります。

図表Ⅳ-4 大学生活の目的(学部生)

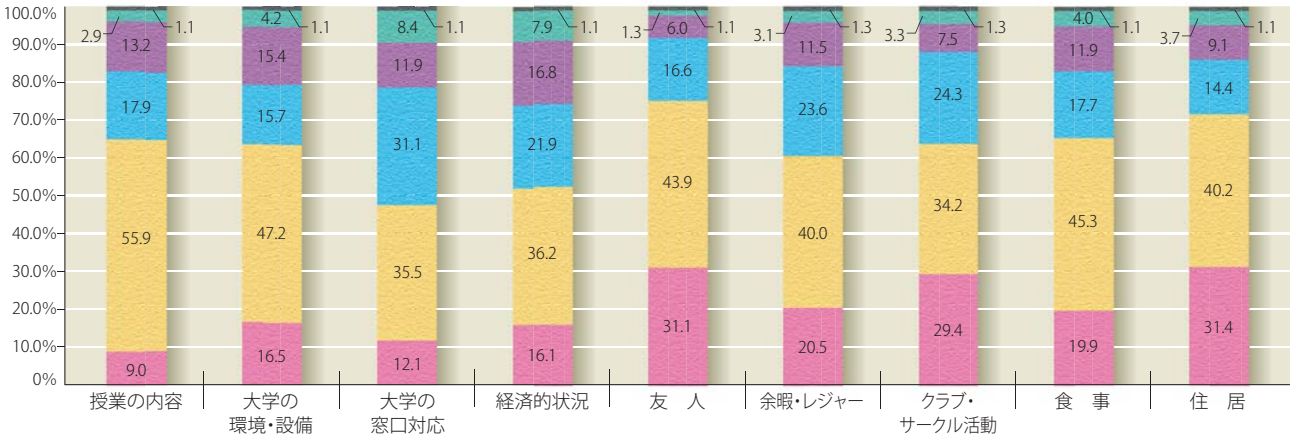


図表Ⅳ-5 大学生活の目的(大学院生)

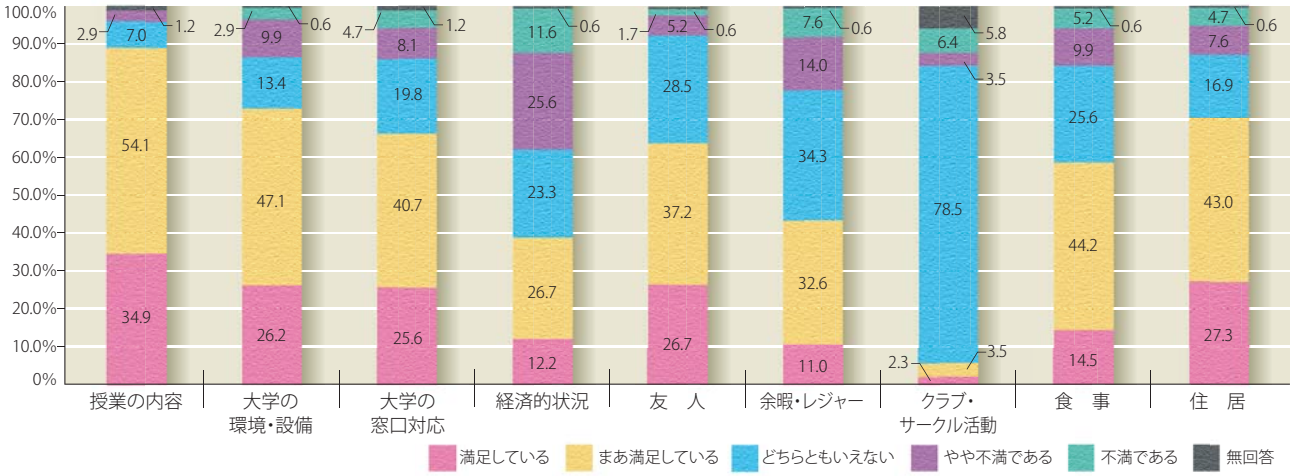


次に学生生活の満足度について見てみましょう[図表 Ⅳ-6、7]。学部生の7割以上が[友人]や[住居]についてはほぼ満足しているようです。次いで[食事][授業の内容][大学の環境・設備][クラブ・サークル活動][余暇・レジャー]等があげられています。大学院生の場合、最も満足度が高いのは[授業の内容]で、ほぼ9割の学生が「満足している」「まあ満足している」と回答しています。次に[大学の環境・設備]もあげられていますので、大学院生の大学に対する満足度は高いといえるでしょう。[大学の窓口対応]については、前回「まあ満足している」以上が前々回の22.5%から50%近くに増加しましたが、今回はさらに増えて52%となっています。特に大学院生は「まあ満足している」以上が66.3%となっていて、各研究科事務室をはじめとする窓口の対応に改善が進んでいる成果と考えられます。ただし、学部生の間では相変わらず窓口対応に不満がうかがえるため、この点は今後も改善に対し努力が必要です。

図表Ⅳ-6　学生生活の満足度（学部生）

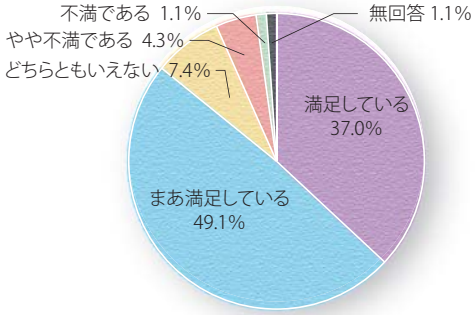


図表Ⅳ-7　学生生活の満足度（大学院生）



大学生活全体の満足度を聞いた設問では、学部生、大学院生に大きな違いは見られませんでした[図表 Ⅳ-8]。8割以上の学生が[満足している][まあ満足している]と答えており（学部生85.7%、大学院生87.2%）、[やや不満である][不満である]と答えた学生は全体で5%程度でした（学部生6.1%、大学院生3.5%）。

図表Ⅳ-8　大学生活全体の満足度（全体）

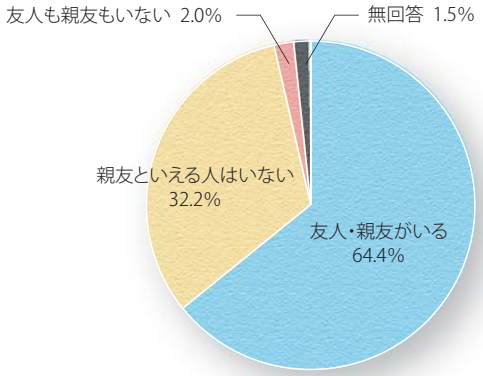


Ⅳ. 学生生活について

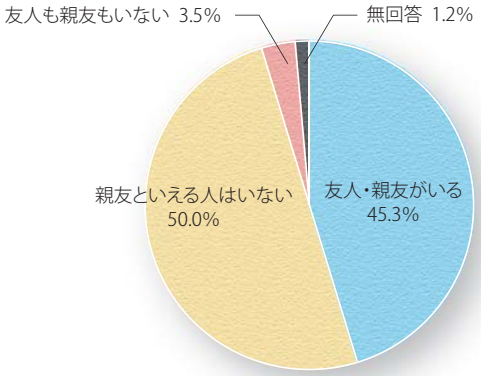
【一橋大学への愛着の度合い】は、学部生・大学院生共に[愛着を感じる][まあ愛着を感じる]と答えた学生が8割以上いました。【学部・研究科への愛着の度合い】は学部生・大学院生共に約7割が同様に答えました。【ゼミへの愛着の度合い】を見ると[愛着を感じる][まあ愛着を感じる]と答えたのは学部生48.4%に対し大学院生80.2%と開きがありますが、学生の多くは一橋大学に愛着を感じていると言ってよいでしょう。

大学での友人関係については、[友人・親友がいる]と答えたのは学部生が64.4%、大学院生が45.3%にとどまっていますが、[友人も親友もいない]と答えたのは学部生2.0%、大学院生3.5%ですから、ほとんどの学生が学友と何らかの交流があることがわかります[図表 Ⅳ-9、10]。

図表Ⅳ-9 大学での友人関係（学部生）



図表Ⅳ-10 大学での友人関係（大学院生）

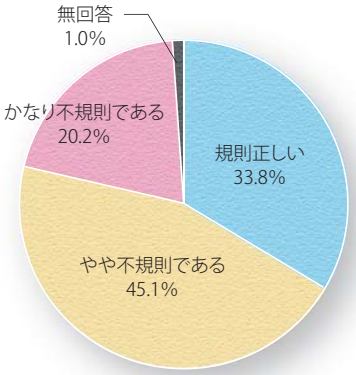


【自分の生活リズム】は3割の学生が[規則正しい]と答えていますが（学部生33.6%、大学院生34.3%）、6割以上の学生が[やや不規則である][かなり不規則である]と答えています（学部生65.2%、大学院生65.1%）[図表 Ⅳ-11]。

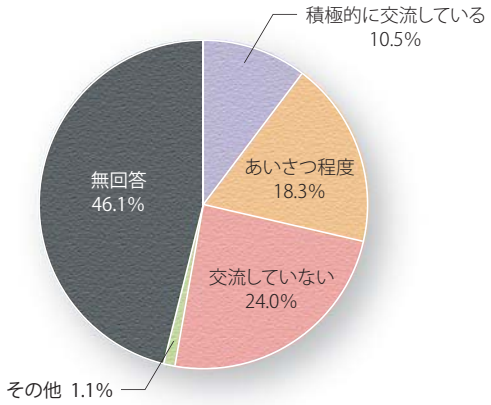
【外国人留学生との交流】については[積極的に交流している]と答えた学生は学部生10.0%、大学院生12.9%と低い数値になっています。部活やサークルを通しての交流なども望まれるところです[図表 Ⅳ-12]。

【授業の合間や昼休みなどを過ごす場所】では、学部生の半数が[学内食堂]と答えており、次に[図書館][教室等]と答えました。大学院生は[図書館]が46.5%でもっとも多く、次は[その他][教室等]となっていました。

図表Ⅳ-11 自分の生活リズム（全体）



図表Ⅳ-12 外国人留学生との交流（全体）



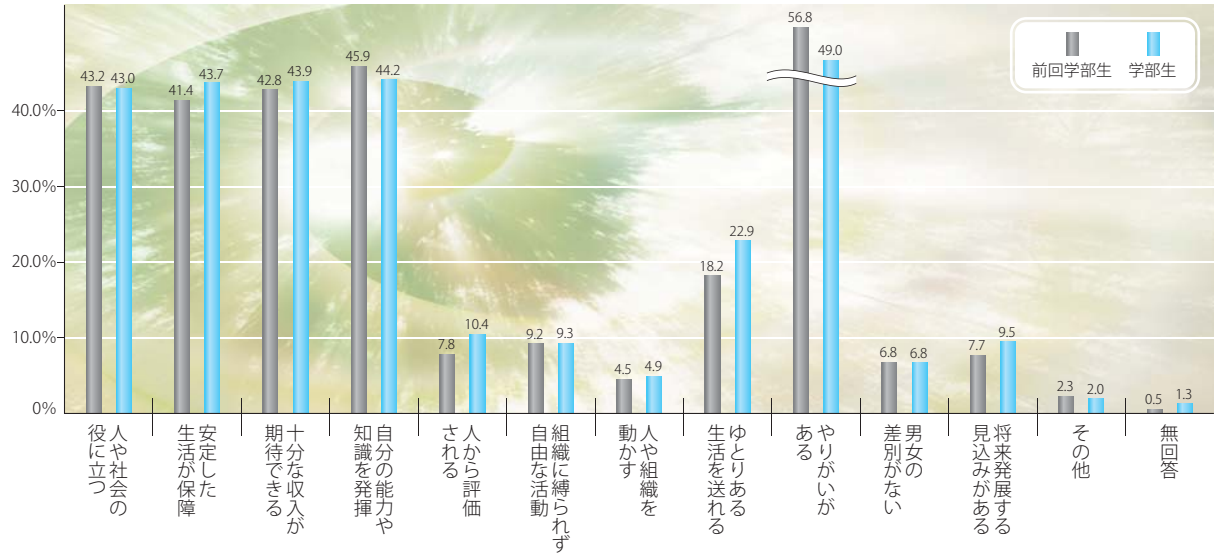
V. 進路・就職について

進路・就職については、学部生と大学院生とではかなり状況が異なるようです。以下、それぞれについてみてみましょう。

学部生

学部生の卒業後の進路は企業、官公庁等への就職のほか大学院進学、資格取得、海外留学、起業など多様化しています。一般的に新規学卒者の就職後3年以内の離職率が3割を超えると推計されていますが、これに比べ、本学卒業生の離職率は低いと推定されます。【仕事を選ぶ時に大切にするもの】でも、[やりがいがある]49.0%は[自分の能力や知識を発揮]44.2%[十分な収入が期待できる]43.9%[安定した生活が保障]43.7%[人や社会の役に立つ]43.0%を上回っています[図表 V-1]。

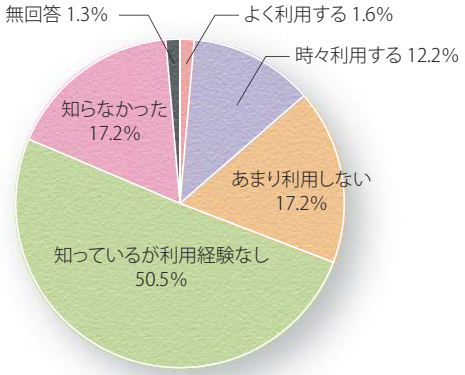
図表V-1 仕事を選ぶ時に大切にするもの(学部生)



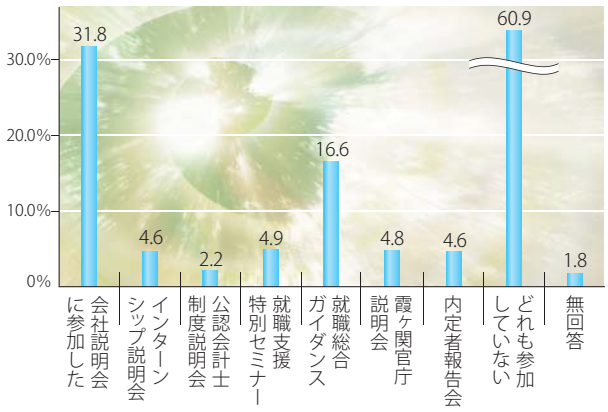
キャリア支援室では、自分に適した職業に就くため、授業に支障の無い範囲で、出来るだけ多くの企業人と接点を持ち、様々な職種を理解し選択することを推奨しています。また、キャリア支援室は、通年の「個別面談」に加えて、「インターンシップ」「就職総合ガイダンス」「会社説明会」ほか各種セミナーや講座などを開催していますが、[知っているが利用経験なし]と回答した学生が50.5%で、これは1, 2年生の殆どが利用経験なしというキャリア支援室の個別相談データと一致します。[よく利用する][時々利用する][あまり利用しない]の3項すなわち、少なくとも利用したことのある学生は31.0%で、3,4年生の約70%となります。

また、[会社説明会に参加した]31.8%は3,4年生の約71%で、[どれにも参加していない]と回答した60.9%は、主に1, 2年生が参加していないことの表れと推定できます[図表 V-2、3]。

図表V-2 キャリア支援室における情報提供とアドバイスの利用(学部生)



図表V-3 キャリア支援室の企画への参加(学部生)

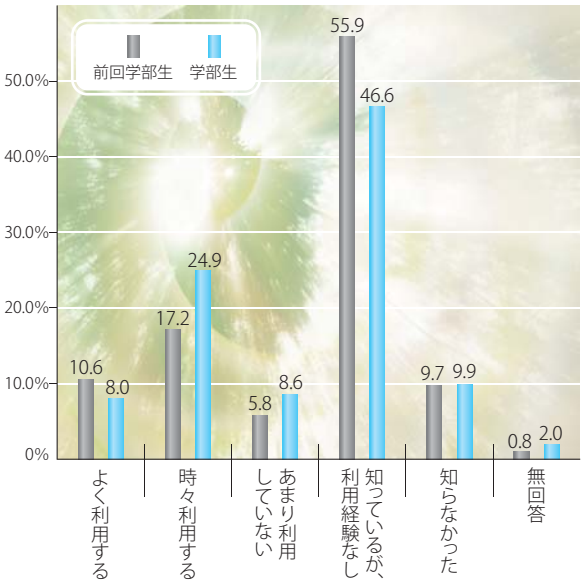


V. 進路・就職について

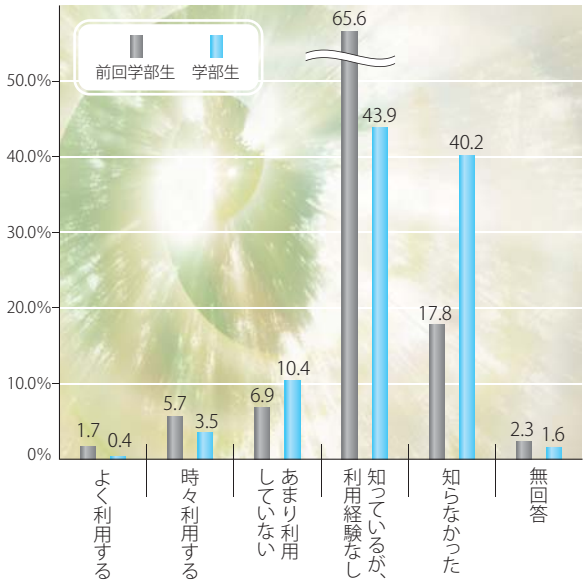
進路支援策の【キャリアデザイン論等の利用度合い】については、4割の学生が利用した経験があります[図表 V-4]。また[知っているが利用経験なし]と[知らなかった]を合わせた数値も低くなっていますので、学生の認知は高くなっていると考えていいでしょう。ただし、本設問は就職を意識していない1・2年生の意見も多く含まれていますので、数値をそのまま認知度と考えることはできないかもしれません。

進路支援策のインターンシップ情報の利用度合いについては、[よく利用する][時々利用する]が3.9%です[図表 V-5]。キャリア支援室で主催するインターンシップの場合、マナー等の事前研修が義務付けられており、参加のハードルが高い可能性があります。一方、企業が主催するインターンシップが広く行われており、日当が支払われるケースもあり、多くの学生が参加してます。

図表V-4 進路支援(キャリアデザイン論等)の利用度合い(学部生)



図表V-5 進路支援(インターンシップの情報)の利用度合い(学部生)



【就職活動を始めた時期】に関しては、[3年生後半]との答えが最も多く、35.6%でした。次に[3年生前半]が6.2%でした。この設問も1・2年生に対しても聞いていますので、実際に就職活動を始めた学生だけを考えれば、半数以上の学生が[3年生後半]という答えになるものと思われます。

【行っていた就職活動】では、[インターネット等で情報収集][セミナーや説明会に参加]とする学生が3割ずついました。[就職のために勉強](6.0%)[資格のために勉強](5.1%)と答えた学生もおりました。

【進路を考える際の主な相談相手】としては、[友人・先輩]と答えた学生が最も多く47.2%、次に[家族・親戚]との答えが43.9%でした。[キャリア支援室][学生相談室]と答えた学生は合わせても2%に届きませんが、本設問では「主な相談相手」を聞いていますので、一番身近な友人や先輩が多く挙げられたものと思われます(「キャリア支援室」「学生相談室」については「XI.生活支援について」もあわせてご覧ください)。

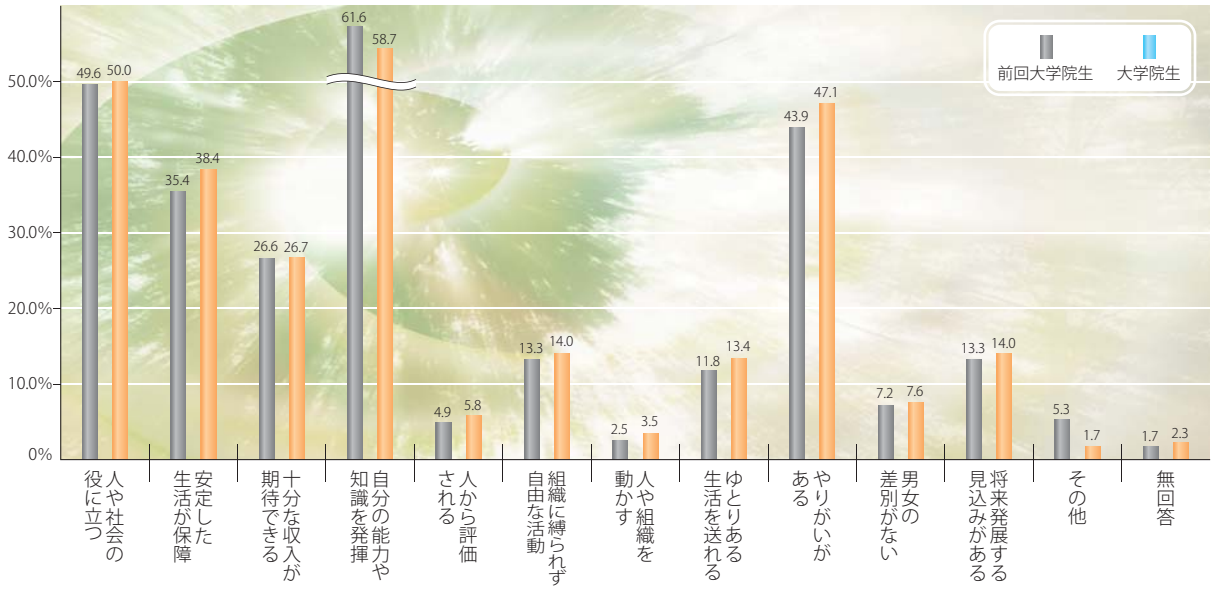
大学院生

大学院生の就職意識は、学部生とは大きく異なります。大学への要望のうち「就職対策の充実」は19.2%に留まっています。大学院生では学部生対応と異なり「就職支援」ではなく「将来の進路選択支援」という視点が重要です。【仕事を選ぶ時に大切にするもの】では[自分の能力や知識を発揮]が最も多く、次いで[人や社会の役に立つ][やりがいがある]の順でした。平成17、19年度と本年度を比較すると[安定した生活が保障](41.4→35.4→38.4%)や[ゆとりある生活を送れる](18.2→11.8→13.4%)となっており、専門性・公益性に関心を持ちつつも、経済的な安定もまた重要なものになってきている傾向があるといえます[図表 V-6]。

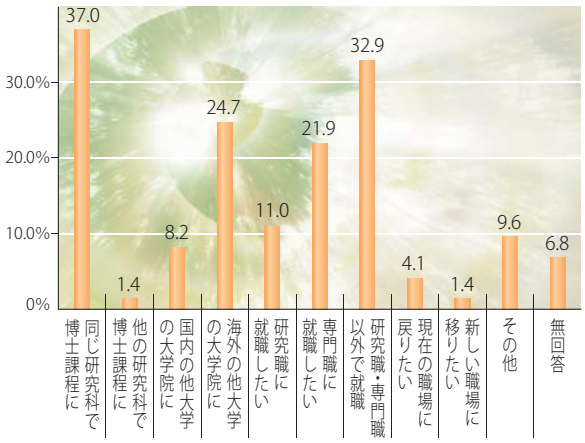
進路に関しては、多くの大学院生が大学に残ることを希望しているようです。とくに、専門職大学院、博士課程の学生は専門職に就きたい学生が29.8%であるのに対して、それ以外の職に就きたいと答えたのは3.2%に過ぎません。しかし修士課程の学生を見ると、専門職に就きたいと答えたのは21.9%で、それ以外を希望する者が32.9%にのぼっています。近年、修士課程を修了して研究職以外の一般企業等に就職する学生が増えているのはご承知のとおりですが、この数字からもそうした状況がわかります[図表 V-7、8]。

研究職を目指す学生に対するアカデミックキャリア構築の支援も重要ですし、また、修士課程の学生に対しては学部学生に準じた就職支援も緊急課題になっていると言えます。

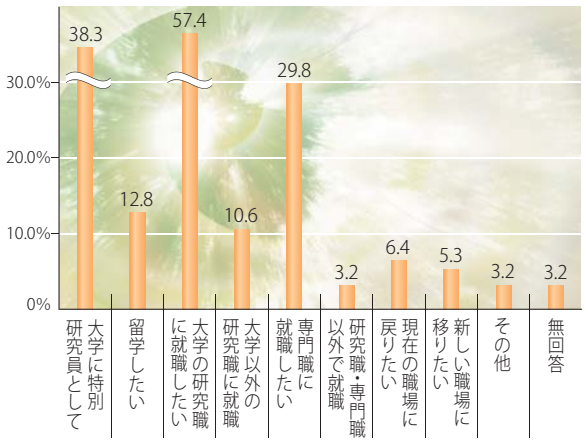
図表V-6 仕事を選ぶ時に大切にするもの(大学院生)



図表V-7 修士課程修了後について/主なものふたつ



図表V-8 専門職大学院・博士課程修了後について/主なものふたつ



Ⅵ. 家庭の状況について

この項目では、主たる家計支持者に関して質問をしています。

【主たる家計支持者】は学部生と大学院生共に「父」が一番多く学部生89.0%、大学院生44.8%でした。学部生と大学院生との一番大きな違いは、同質問で「本人」と答えた学部生は0%であったのに対して、大学院生は34.3%（19年度は17.9%）と大きな違いがあり、大学院生は3人にひとりの割合で経済的に自立して学生生活を行っており、前回の調査と比較しても、大学院生の家計の状況がより厳しくなってきていることがわかります。

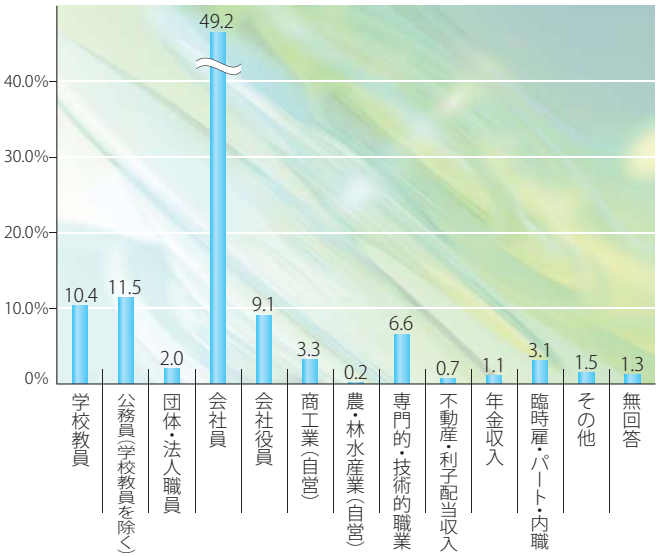
学部生

学部生の主たる家計支持者は「父」が89.0%（前回90.0%）と最も多く、次に「母」が6.6%（前回6.9%）、他は「誰と一口に言えない」の2.0%を除き、その他の回答はすべて1%以下でした。全体的な比率は前回とほぼ同じです。

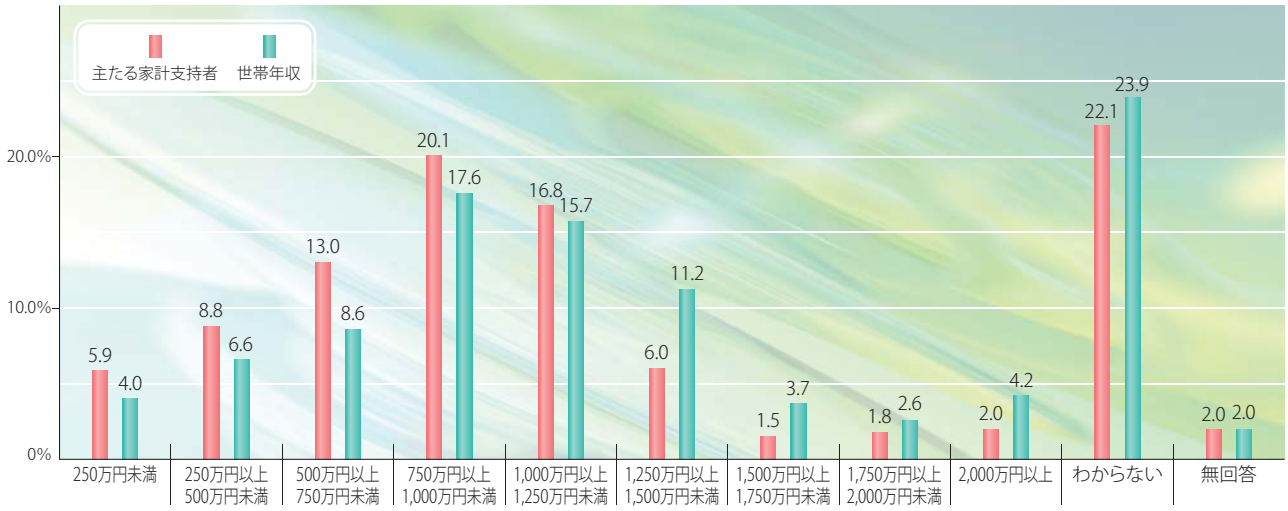
主たる家計支持者の職業は「会社員」が49.2%、次に「公務員」11.5%、「学校教員」10.4%「会社役員」9.1%、「専門的・技術的職業」6.6%と続きます［図表Ⅵ-1］。全体的な家計支持者の職業の比率は前回とほとんど変わりません。

学部生の家計支持者の年収についても、全体的な比率は前回とほぼ変わりませんが、年収1,000万円以上の高額所得者がやや減少しているようです。［図表Ⅵ-2］ここにも現代の社会経済事情が反映されていると考えて良いでしょう。ちなみに国税庁『民間給与実態統計調査』によりますと、平成20年度分平均給与は429万6千円です。

図表Ⅵ-1　主たる家計支持者の職業（学部生）



図表Ⅵ-2　主たる家計支持者の年収／世帯年収（学部生）



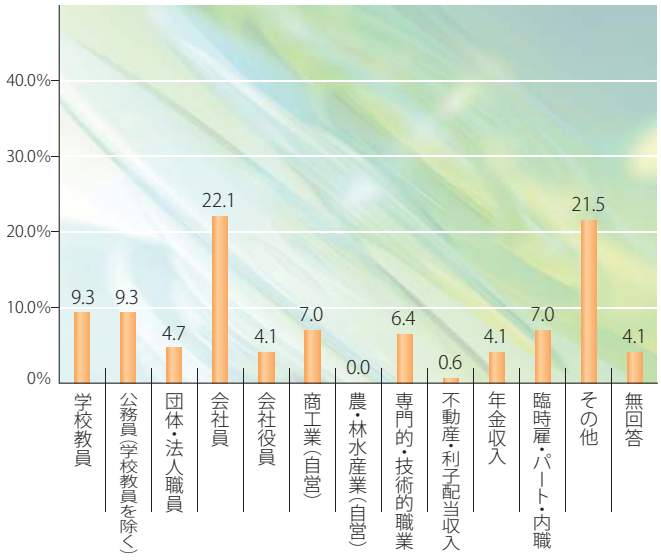
大学院生

大学院生の主たる家計支持者は学部生と大きく異なり、「父」が44.8%（前回55.9%）と最も多く、その次は「本人」で34.3%（前回17.9%）、「母」が7.6%（前回7.0%）、「配偶者」5.8%（前回10.3%）と続きます。前回調査と比較しても「本人」の割合が大きく増えており、大学院生の切実な経済事情がうかがえます。

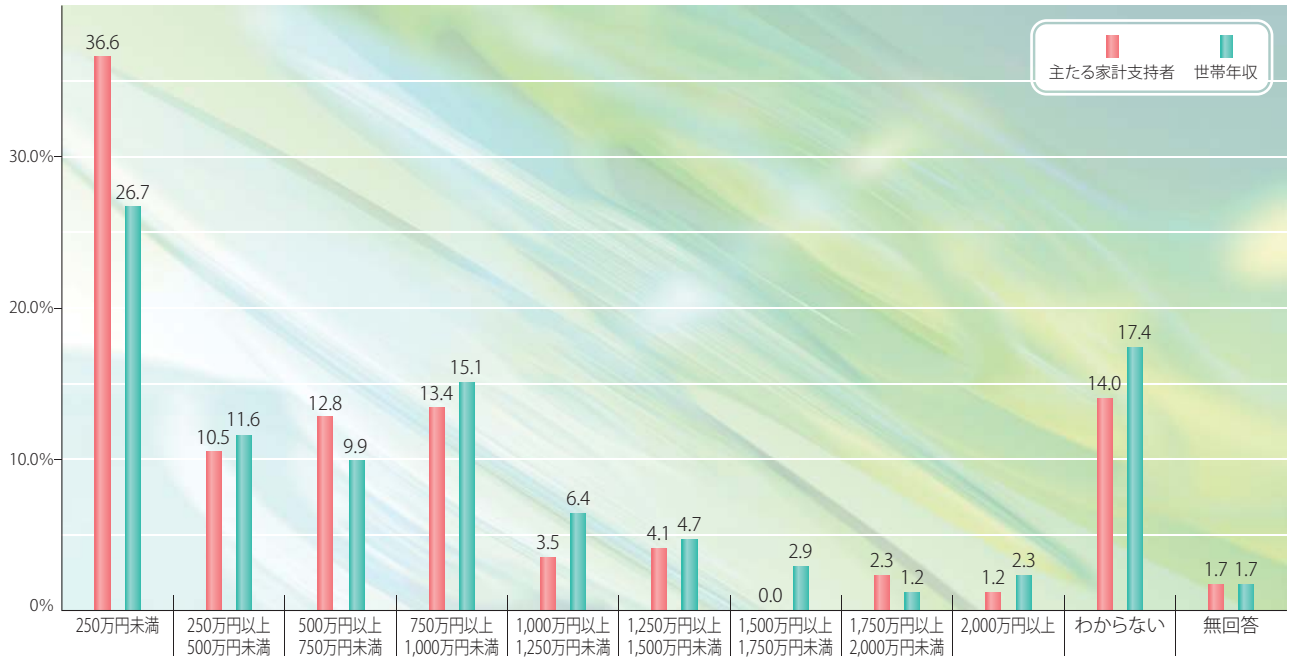
大学院生の主たる家計支持者の職業は上記のことから考えて、ほぼ「父」の職業と考えられます。「会社員」22.1%、その次の「その他」21.5%は「本人」と答えた学生が多く含まれているものと思われます。次いで「公務員」と「学校教員」が9.3%、「商工業」と「臨時雇・パート・内職」の7.0%と続きます［図表 Ⅵ-3］。

大学院生の家計支持者の年収についても、「本人」が多く含まれますので、学部生のそれとは大きく異なります［図表 Ⅵ-4］。比率は前回と比較して「本人」と推測される年収500万円以下が大幅に増加し（主たる家計支持者／23.4%→36.6%）、年収1,000万円以上の高額所得者がやや減少しています。

図表Ⅵ-3　主たる家計支持者の職業（大学院生）



図表Ⅵ-4　主たる家計支持者の年収／世帯年収（大学院生）



Ⅶ. 生活費の状況について

学部生

1ヶ月の平均収支額にはバラつきがあります[図表 Ⅶ-1]。これは自宅生と自宅外生の生活の違いによるものと思われます。

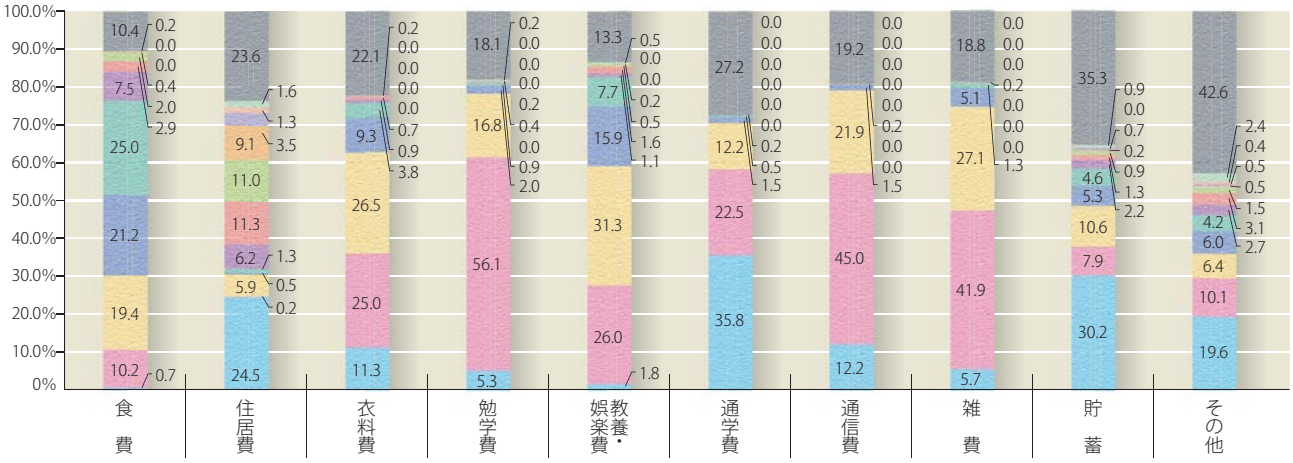
1ヶ月の支出の構成については、一番大きいのは[食費]です。[勉学費][通学費][通信費]ともに約6割の学生が1万円未満と答えています。収入額の構成については、約8割の学生は家族から何らかの支援を受けているようです。しかしアルバイト等の収入もかなりの比重を占めています[図表 Ⅶ-2、3]。

現在の暮らし向きは5割以上の学生が[かなり楽][やや楽]と答えており、約2割の学生が[やや苦しい][たいへん苦しい]と答えました[図表 Ⅶ-4]。

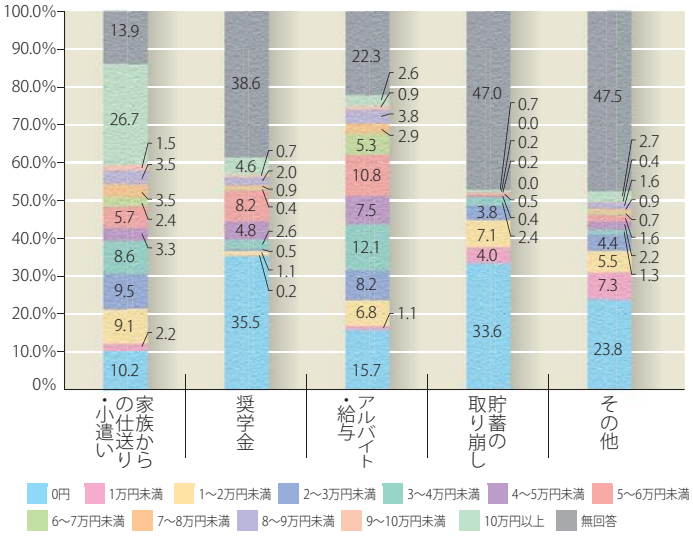
【家庭からの仕送り・援助と修学の関係】は7割の学生が「仕送りのみで可能」としており、【昨年と比べた家庭からの仕送り・援助額】は7割以上の学生が「昨年と変わらない」と答えています。

図表Ⅶ-1 1ヶ月の平均支出額／支出合計（学部生）

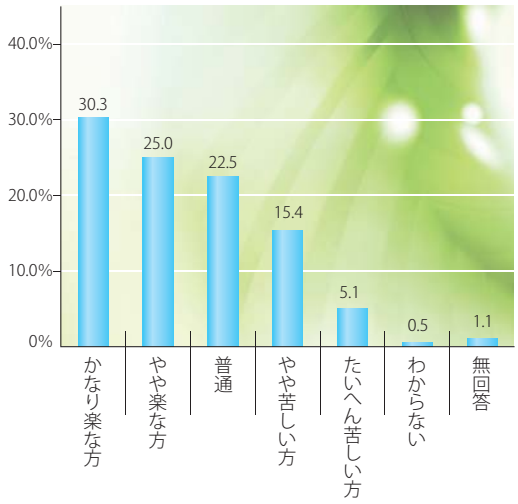
図表Ⅶ-2 1ヶ月の平均支出額／支出の構成（学部生）



図表Ⅶ-3 1ヶ月の平均収入額／収入の構成（学部生）



図表Ⅶ-4 現在の暮らし向きについて（学部生）



大学院生

1ヶ月の平均収支額は学部生よりもやや多いようです[図表 Ⅶ-5]。

支出の構成は、特に[住居費]と[勉学費]が学部生よりも大きく、他も全体的に学部生よりも支出額が多い傾向が見られます[図表 Ⅶ-6]。通学費が学部生と比較して多いのは、小平市に住んでいる学生が多いことによるものと思われます。

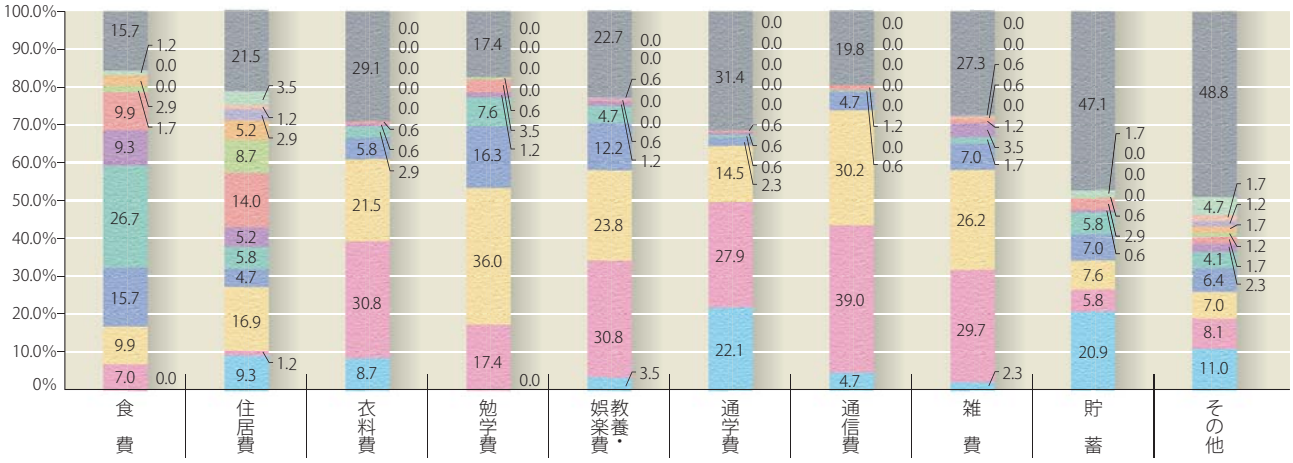
収入額の構成については家族からの仕送りや小遣いが少ない分、奨学金やアルバイトによって生活をしていることがわかります[図表 Ⅶ-7]。

現在の暮らし向きは約3割の学生が[やや苦しい][たいへん苦しい]と答えています[図表 Ⅶ-8]。

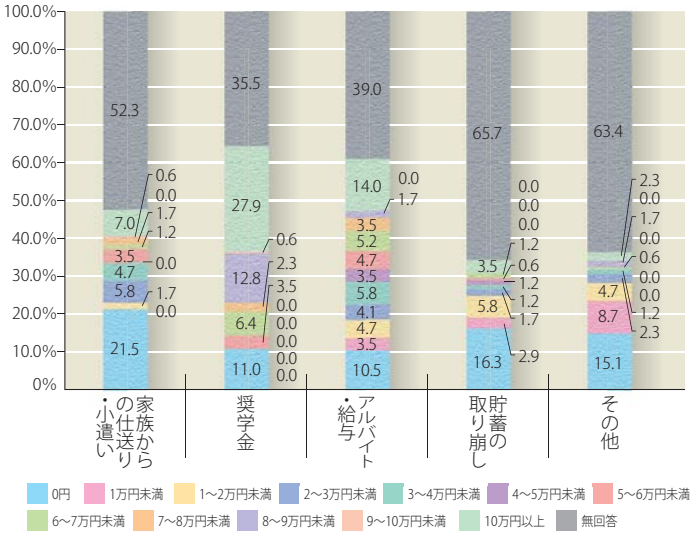
他の質問項目でも【家庭からの仕送り・援助と修学の関係】は半数の学生が仕送りを受けておらず、【昨年と比べた家庭からの仕送り・援助額】は8割の学生が「昨年と変わらない」「減少した」と答えています。

図表Ⅶ-5 1ヶ月の平均支出額／支出合計（大学院生）

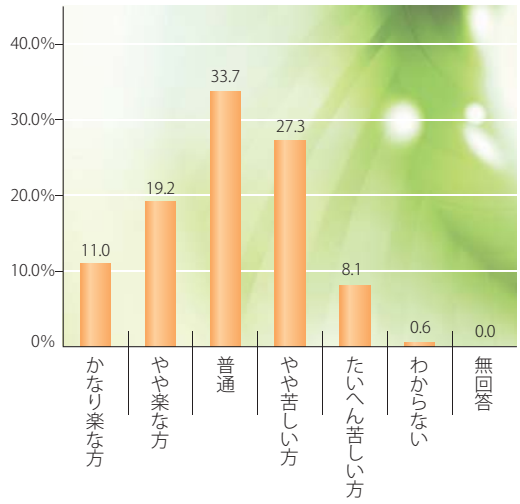
図表Ⅶ-6 1ヶ月の平均支出額／支出の構成（大学院生）



図表Ⅶ-7 1ヶ月の平均収入額／収入の構成（大学院生）



図表Ⅶ-8 現在の暮らし向きについて（大学院生）



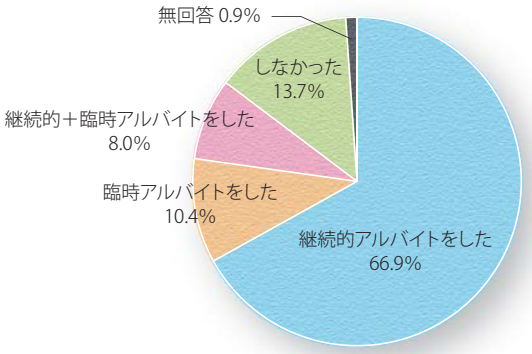
Ⅷ．アルバイトについて

過去一年間のアルバイト経験に関しては、全体で81.2%の学生がアルバイトを経験しています。学部生と大学院生の違いとしては、「しなかった」と答えた学生が学部生は13.7%であるのに対し、大学院生は30.8%ありました[図表 Ⅷ-1、2]。

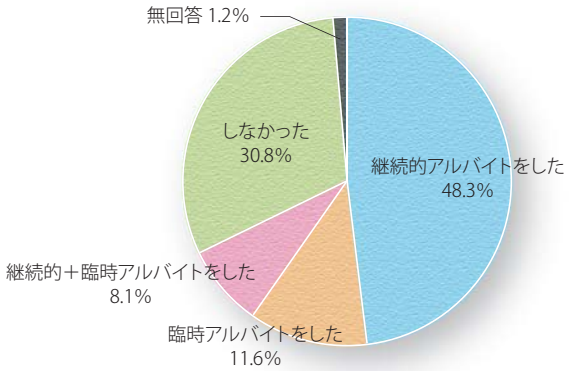
アルバイトの頻度に関しては8割以上が「週に数日」と答え、アルバイトに費やす時間に関しては3割以上が「5時間～10時間未満」と答えました。これは学部生、大学院生共にほぼ同じ割合です[図表 Ⅷ-3]。

アルバイトの種類に関しては学部生と大学院生とで違いが見られ、学部生は「販売・セールス・サービス業」が43.9%でトップ、次に「塾講師」「家庭教師」と続くのに対し、大学院生は「一橋大学でのTAやRA」が36.8%でトップ、次に「特殊技術を要すること」「販売・セールス・サービス業」の順でした[図表 Ⅷ-4]。

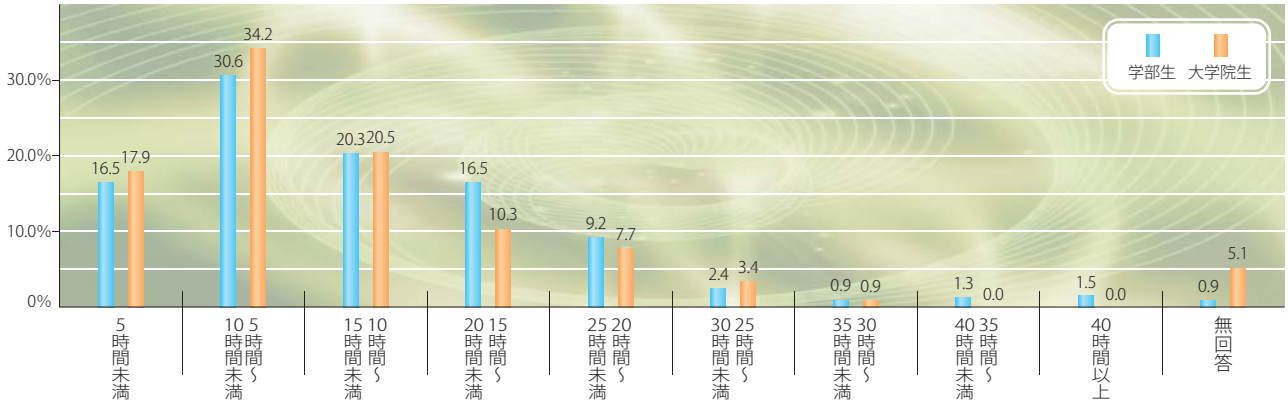
図表Ⅷ-1 過去1年間のアルバイト経験（学部生）



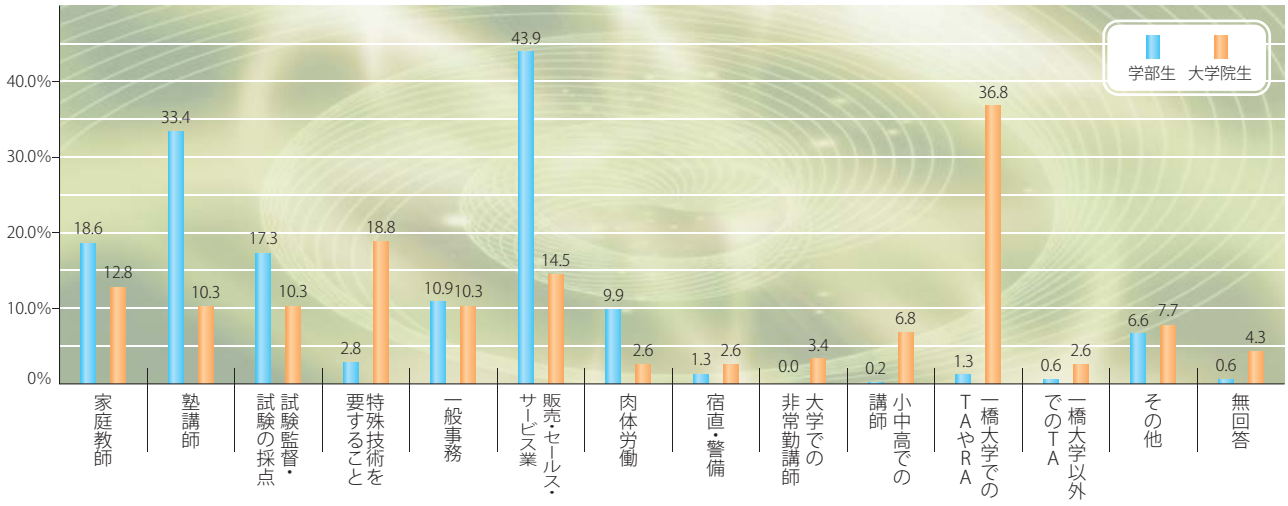
図表Ⅷ-2 過去1年間のアルバイト経験（大学院生）



図表Ⅷ-3 一週間あたりのアルバイトに費やす時間（学部生・大学院生）



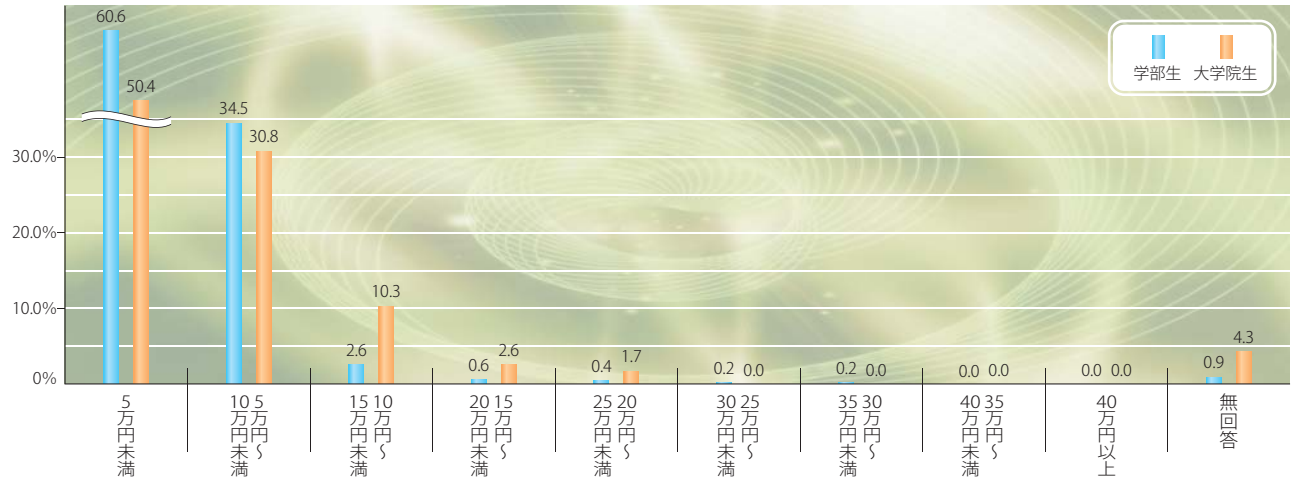
図表Ⅷ-4 アルバイトの種類／主なもの2つ（学部生・大学院生）



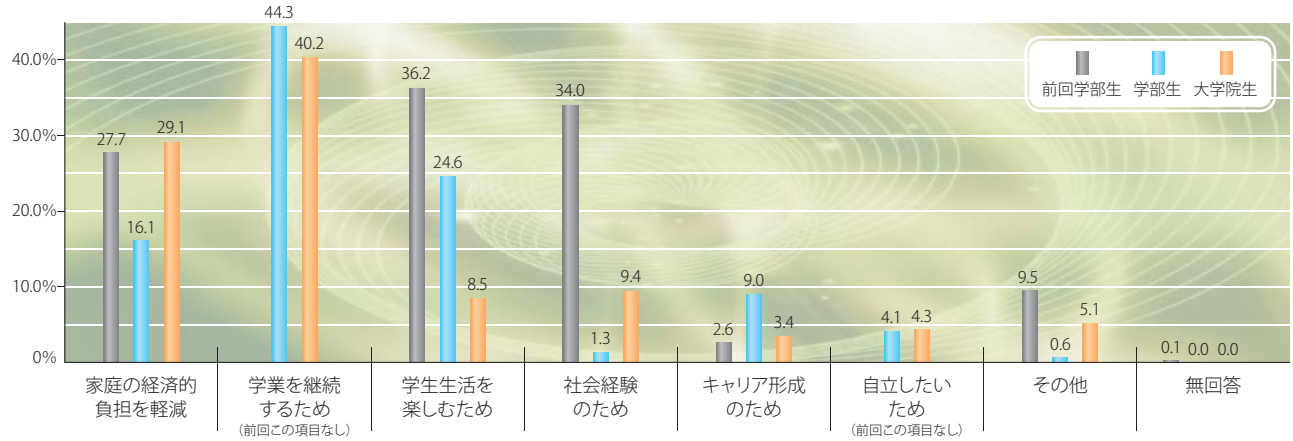
アルバイトによる1ヶ月あたりの平均収入額は5万円未満が最も多く、10万円未満までを含めると、学部生が9割以上、大学院生が8割以上となります[図表 Ⅷ-5]。全体的な収入としてはやはり大学院生の方が若干多いようです。

アルバイトをした主な理由に関しては、学部生の場合「学業を継続するため」が44.3%と最も多く、次に「学生生活を楽しむため」24.6%、「家庭の経済的負担を軽減」16.1%と続きます[図表 Ⅷ-6]。前回調査では「学生生活を楽しむため」が36.2%で一番多く、次が「社会経験のため」34.0%、「家庭の経済的負担を軽減」27.7%でした。「社会経験のため」が大幅に減少しているのは、今回は「学業を継続するため」など、回答項目が増えたためではないかと思われます。大学院生では「学業を継続するため」が40.2%で最も多く、次に「家庭の負担を軽減」29.1%、「社会経験のため」9.4%となりました。

図表Ⅷ-5 アルバイトによる1ヶ月あたりの平均収入額（学部生・大学院生）



図表Ⅷ-6 アルバイトをした主な理由（前回学部生・学部生・大学院生）



［アルバイト収入の使い道］は、学部生は「教養・娯楽費」69.2%、次に「生活費（衣・食・住居費）」61.9%、「旅行（帰省費も含む）」22.3%でした。大学院生の場合は「生活費」が70.1%と最も多く、次に「勉学費」39.3%、「教養・娯楽費」26.5%と続きます。これは大学院生のほうが家計を自分でまかなっている者が多いためと思われます。

［昨年と比べたアルバイト時間］は両者とも「変わらない」（学部生24.6%大学院生33.3%）が最も多いものの、「かなり増加した」「少し増加した」を合わせると学部生39.2%、大学院生29.9%であり、学生にとってアルバイトはますます必要不可欠なものになっているようです。

学業などへの影響については、「ほとんど支障はない」とする意見は学部生47.3%、大学院生は33.3%ありましたが、「授業・睡眠時間・娯楽時間・課外活動」など、なんらかの生活の犠牲を感じている学生も多く見受けられました。

Ⅸ. 経済支援について

大学が実施している経済支援（授業料免除、アルバイト斡旋、学生金庫による短期融資）に関しては、ある程度の周知はされているものの、実際に利用している学生は少ないようです。

［授業料免除の利用］では大学院生の4割が「よく利用する」と答えましたが、学部生の64.9%、大学院生の42.4%が「知っているが利用経験なし」と答え、「知らない」と答えた学生も学部生で24.7%、大学院生で8.7%いました。また、「アルバイト斡旋、学生金庫による短期融資」の利用に関しては全学生の8〜9割が利用したことがないと答えました。

［「各種奨学金の斡旋」への応募］でも、学部生の1割、大学院生の3割が「応募したことがある」と答えたものの、［「如水会、明治産業、明産による海外留学奨学金の提供」への応募］、［「如水会、明治産業、明産以外の海外留学奨学金の提供」への応募］では学部生、大学院生共に9割以上の学生が「知っているが応募経験なし」または「知らない」と答えています。

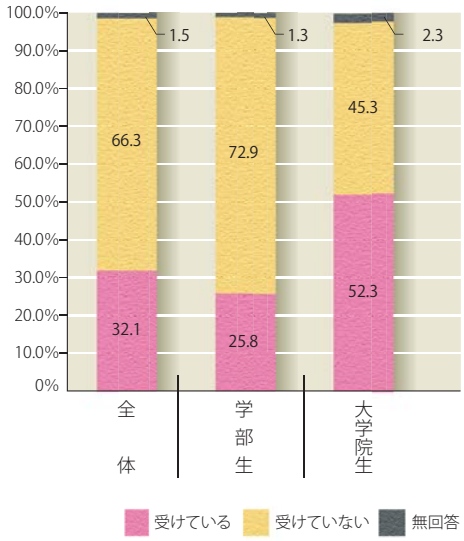
本学は民間企業から提供される奨学金にも比較的恵まれていますので、募集情報の周知等に努める必要があると思われます。

日本学生支援機構または他の団体から実際に奨学金を受けている学生は全体で32.1%（学部生25.8%、大学院生52.3%）いました［図表 Ⅸ-1］。特に大学院生にとって奨学金は学生生活を継続する上で必要なものであることがわかります。（Ⅶ.生活費の状況／P.16〜17参照）。

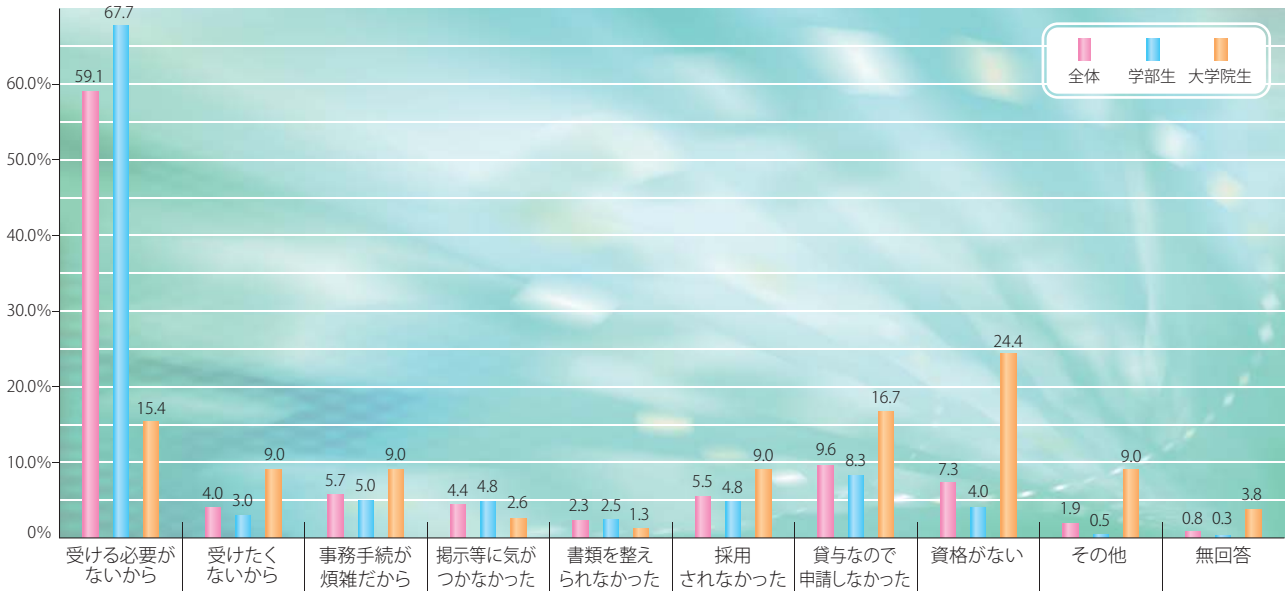
受けている奨学金の種類は日本学生支援機構の「第一種奨学金」が最も多く48.5%（学部生47.5%、大学院生50.0%）、次は「第二種奨学金」の30.7%（学部生42.6%、大学院生12.2%）ですが、大学院生のみでは2位は「留学生対象の奨学金」の27.8%でした。

奨学金を受けていない学生の理由としては、学部生は「受ける必要がないから」67.7%で最も多く、他の回答はすべて10%以下でした。大学院生では「資格がない」が24.4%が最も多く、「貸与なので申請しなかった」16.7%、「受ける必要がないから」15.4%と続きました［図表 Ⅸ-2］。

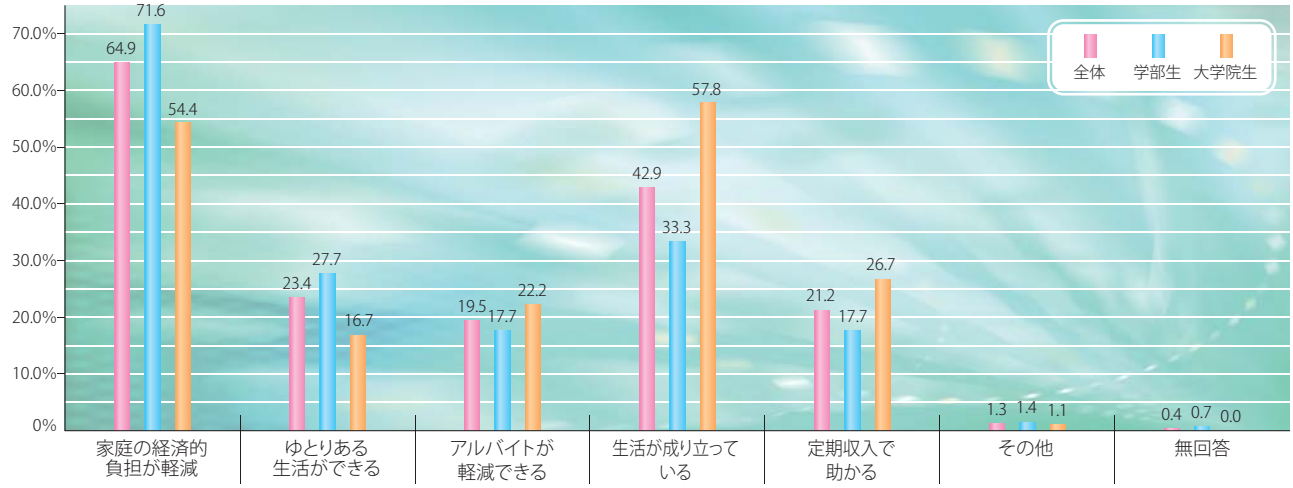
図表Ⅸ-1　日本学生支援機構または他の団体から定期的に奨学金を受けているか（全体・学部生・大学院生）



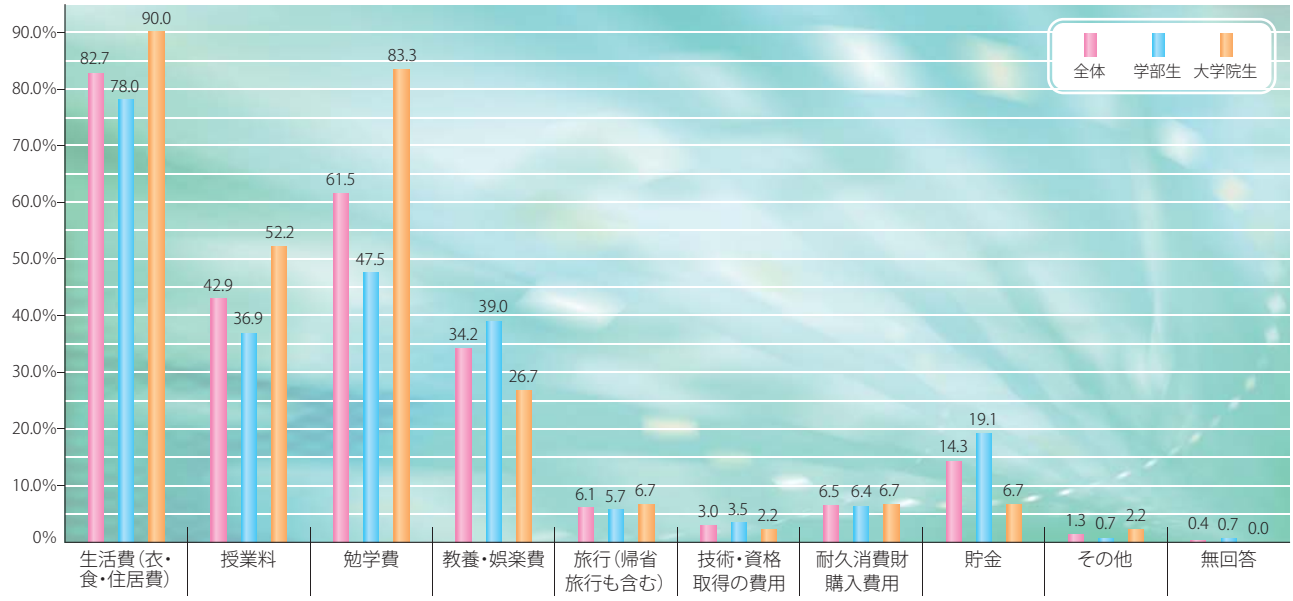
図表Ⅸ-2　日本学生支援機構等からの奨学金を受けない理由（全体・学部生・大学院生）



図表Ⅸ-3 奨学金が役に立っていること／主なもの2つ（全体・学部生・大学院生）



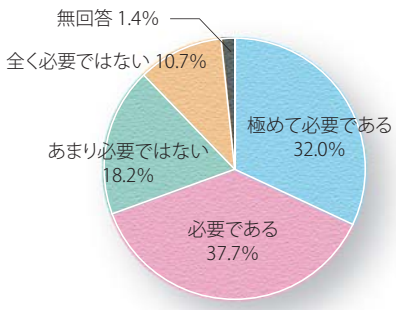
図表Ⅸ-4 奨学金の主たる支出目的〈用途〉／主なもの3つ（全体・学部生・大学院生）



奨学金が役立っていることとしては「家庭の経済的負担が軽減」が64.9%で最も多く、次は「生活が成り立っている」42.9%です［図表 Ⅸ-3］。その主たる支出目的は「生活費」82.7%、次に「勉学費」61.5%、「授業料」42.9%と、学生生活をする上で役立っていることがわかります［図表 Ⅸ-4］。

平成19年度から導入された学業優秀学生奨学金制度の必要性については、「極めて必要である」と「必要である」があわせて69%あり、学生の学習意欲を高め、インセンティブを与えられるものになってきていることがわかります［図表 Ⅸ-5］。

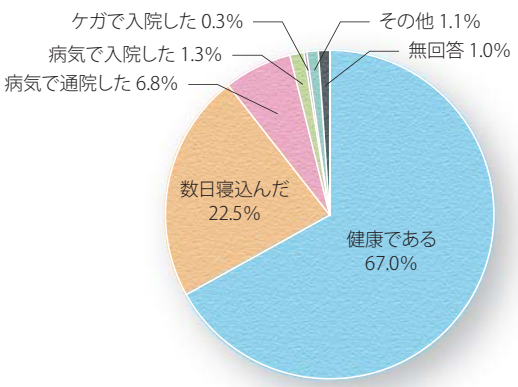
図表Ⅸ-5 成績優秀者に授業料免除・軽減などの経済的優遇をする措置の必要性（全体）



X. 心身の健康について

ここ1年間の健康状態に関しては、学部生、大学院生ともに、「健康である」と答えた学生が6割以上です（学部生66.9%、大学院生67.4%）。風邪などで「数日寝込んだ」を含めれば、ほぼ9割の学生が普通の健康状態であったことがわかりました[図表 X-1]。

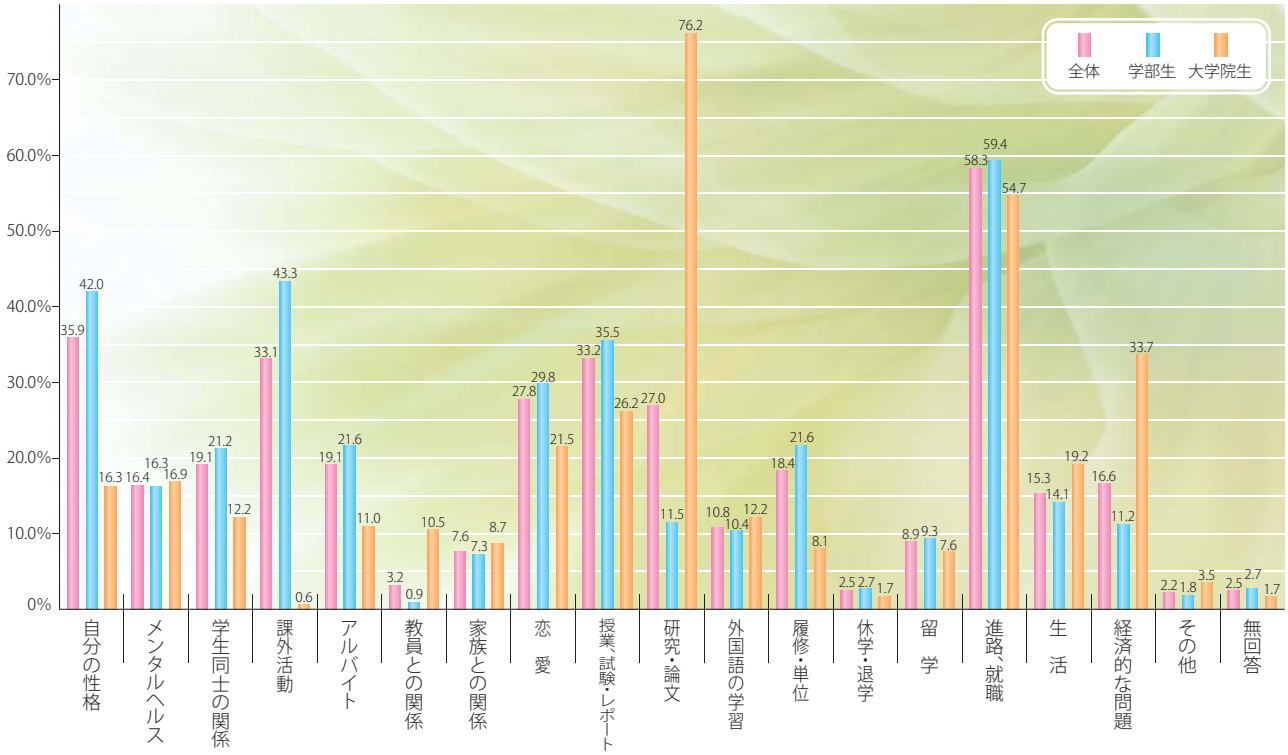
図表X-1 ここ1年間の健康状態（全体）



ここ1年間の悩みの内容に関しては、学部生と大学院生で若干の違いが見られます[図表 X-2]。一番違いが顕著なのは「課外活動」（学部生43.3%、大学院生0.6%）、「研究・論文」（学部生11.5%、大学院生76.2%）、「履修・単位」（学部生21.6%、大学院生8.1%）ですが、これは両者の学生生活の違いからくるものと考えられます。

両者共に多いのは「進路、就職」で（学部生59.4%、大学院生54.7%）、就職の困難な社会状況を反映しており、半数以上の学生が進路や就職に不安を抱いていることがわかります。また、学部生は「自分の性格」が42.0%あるのに対して、大学院生は16.3%と学部生の方が多く、逆に「教員との関係」では学部生0.9%に対して大学院生10.5%、「経済的な問題」も学部生11.2%に対して大学院生33.7%と違いがありました。

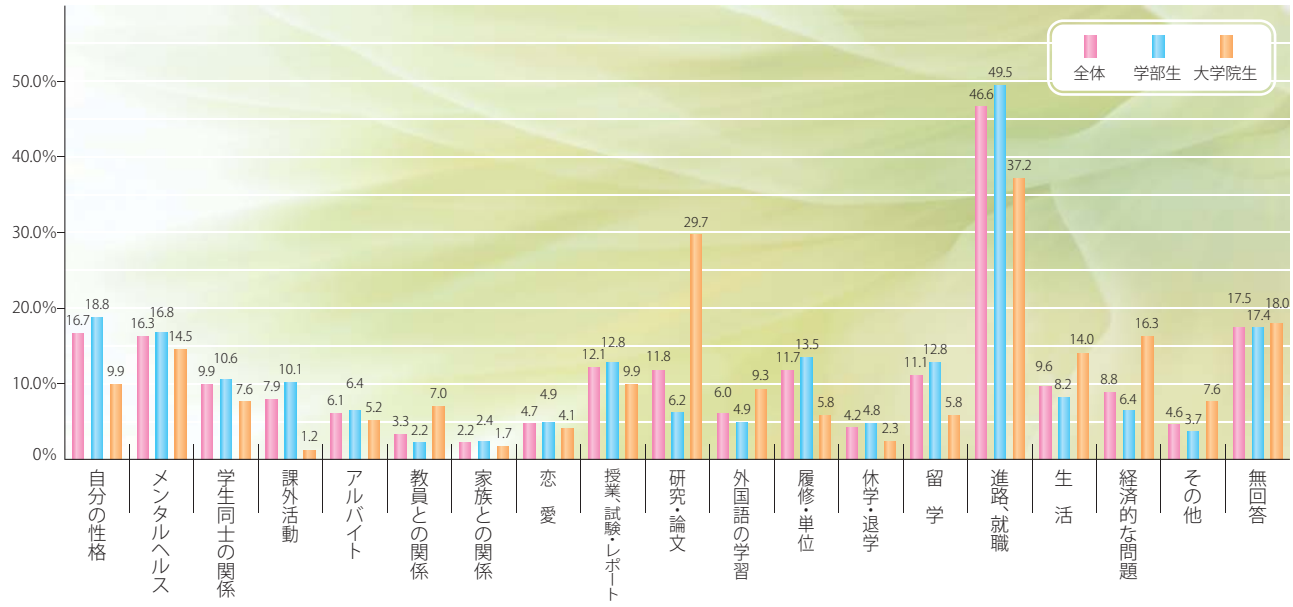
図表X-2 ここ1年間の悩み／該当するもの2つ（全体・学部生・大学院生）



学生相談室に相談したい内容に関しては、学部生と大学院生でほぼ同様の回答が得られました[図表 X-3]。ただし「進路、就職」（学部生49.5%、大学院生37.2%）、「自分の性格」（学部生18.8%、大学院生9.9%）等に関しては学部生の方が多く、「研究・論文」（学部生6.2%、大学院生29.7%）、「経済的な問題」（学部生6.4%、大学院生16.3%）、「生活」（学部生8.2%、大学院

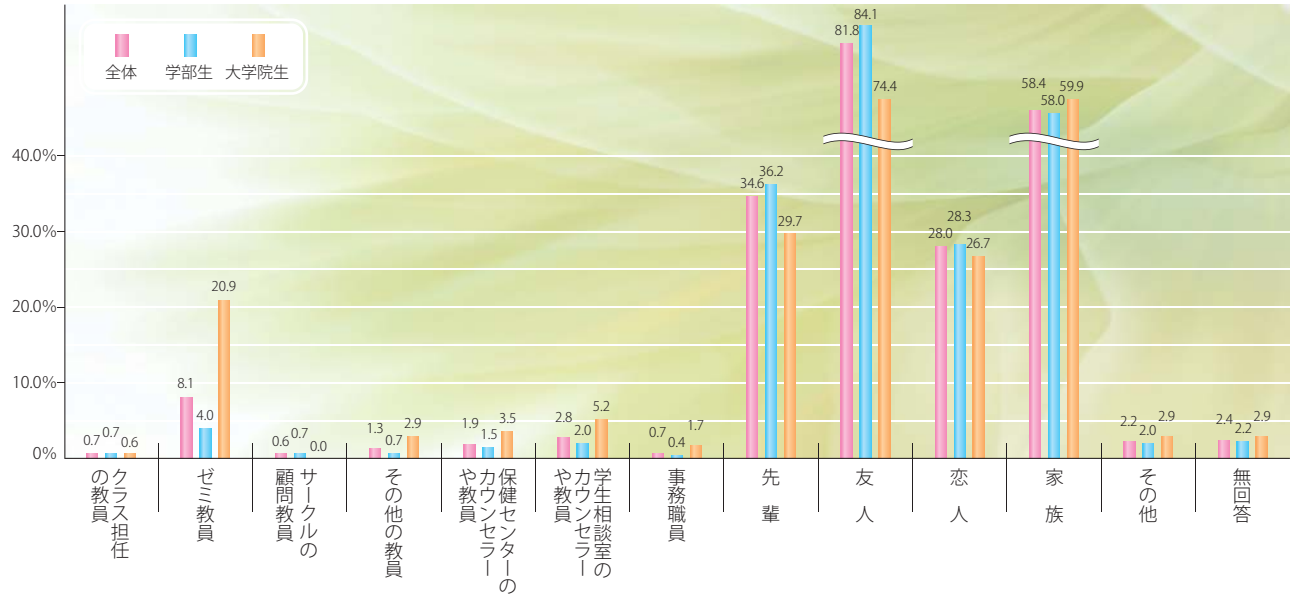
生14.0%）などは大学院生の方が多いという回答が得られました。他の回答と比較して「自分の性格」や「メンタルヘルス」など個人的な内面の問題を相談したいという学生が比較的多いので、大学としても学生の心のケアやサポートを充実させていく必要があると思われます。

図表X-3 学生相談室に相談したい内容／該当するものすべて（全体・学部生・大学院生）



プライベートなことを相談しやすいのはやはり「友人」が一番のようです［図表 X-4］。2位は「家族」で、次に「先輩」、「恋人」と、学部生、大学院生共に同じ順位でした。大学院生は「ゼミ教員」をあげる学生が2割おり、学部生よりも教員との関係がより親密な様子がうかがえます。以上の傾向は前回調査とほぼ同じでした。

図表X-4 私的なことを相談しやすい人は誰／該当するものすべて（全体・学部生・大学院生）



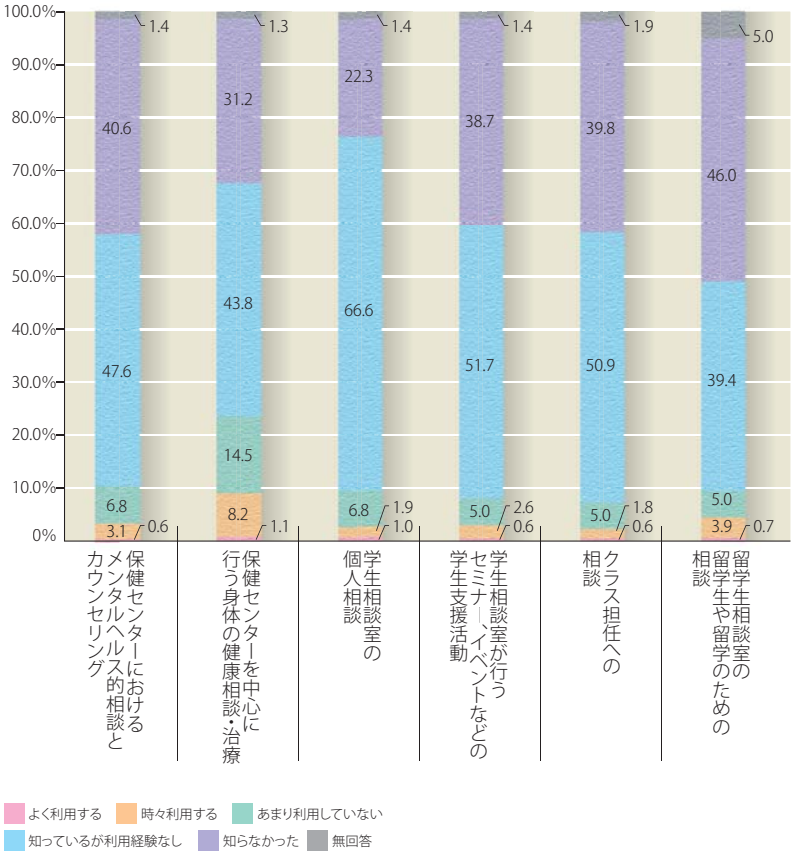
XI. 生活支援について

今回の調査では、【生活支援について】の項目を見直し、大学が学生に対して行っている生活支援活動やそのための施設についての意見を聞く項目を増やしました。学部生と大学院生の間に大きな違いはあまりみられませんでしたので、ここでは全体の傾向を紹介します。

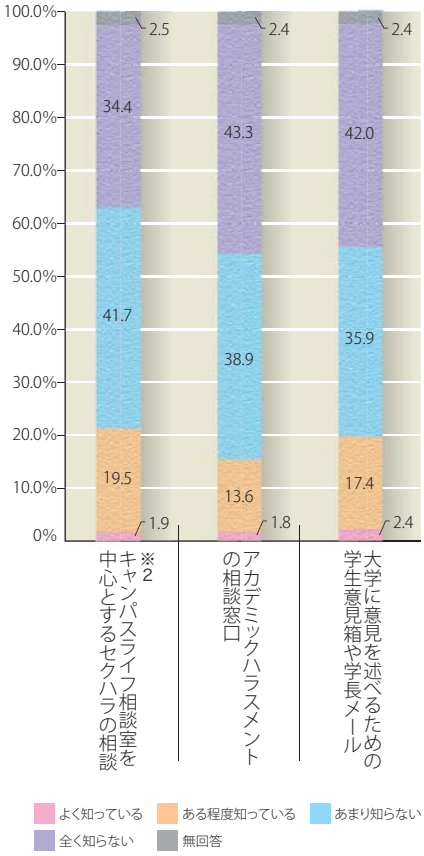
［生活支援の利用と認知 ① ］では、ほとんどの質問で2〜4割の学生が「知らなかった」と回答しています［図表 XI-1］。［保健センターを中心に行う健康相談・治療］を除けば約9割の学生が支援活動やそのための施設を［知っているが利用経験なし］と回答しています。

［生活支援の認知 ② ］でも、約8割の学生が「あまり知らない」または「全く知らない」と答えており［図表 XI-2］、学生の認知度を高める必要があると思われます。

図表XI-1 生活支援の利用と認知 ①（全体）



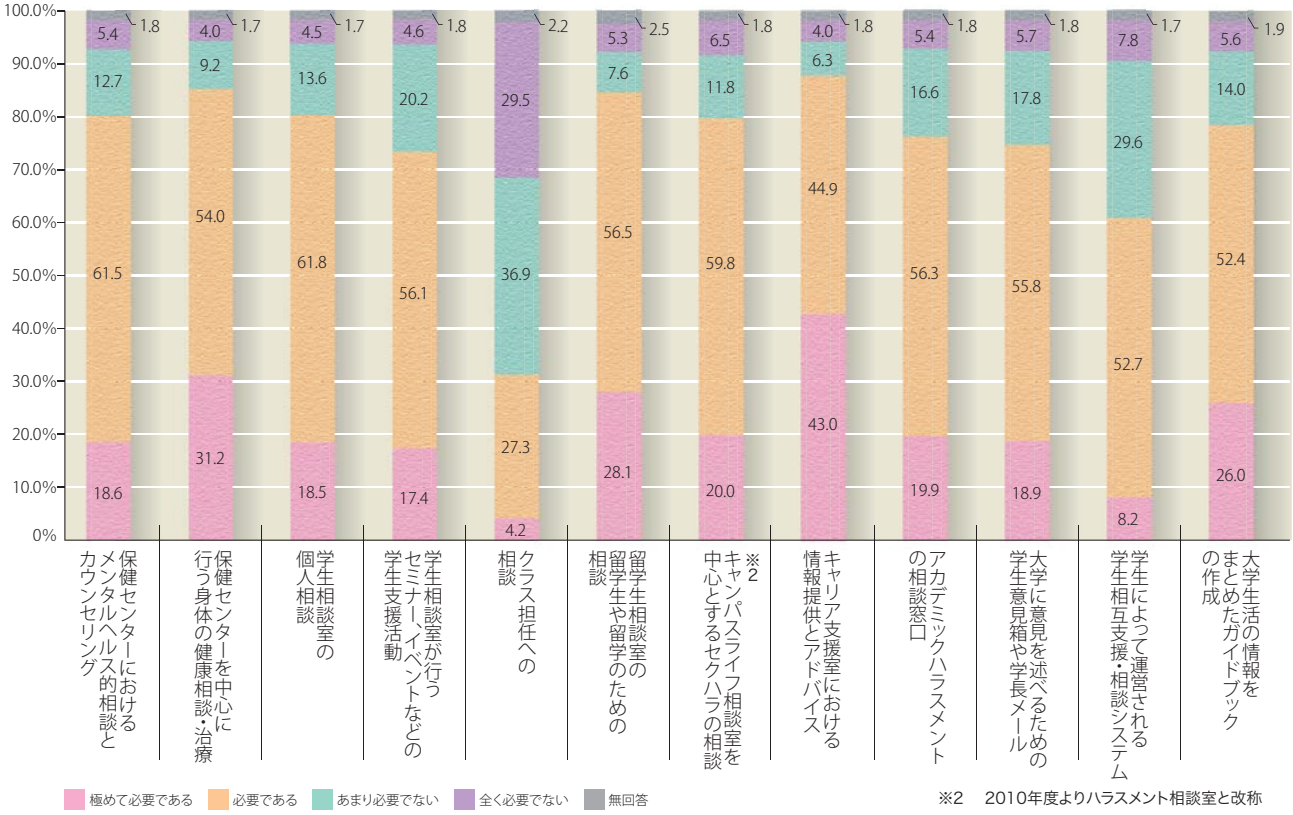
図表XI-2 生活支援の認知 ②（全体）



※2　2010年度よりハラスメント相談室と改称

その一方で、多くの学生が何らかの生活支援が必要、と考えているようです［図表 XI-3］。特に多かったのはキャリア支援室における情報提供とアドバイス」で、43.0%の学生が「極めて必要である」と答えています。就職支援が強く求められていることがここからもわかります。「クラス担任への相談」と「学生によって運営される学生相互支援・相談システム」を除いて、ほぼ全ての項目で約8割の学生が「極めて必要である」「必要である」と答えていますので、大学が行う学生支援そのものには大変大きな需要があり、ここでも、学生が求める時に利用しやすい学生支援の体制やあり方が求められていることがわかります。

図表XI-3 生活支援の必要性（全体）



※2　2010年度よりハラスメント相談室と改称

【入学後にあったトラブル】を聞いた質問では、約8割の学生が「トラブルにはあっていない」と答えています。多かったのは「盗難」で、学部生で16.6%、大学院生で8.1%ありました。両者の違いはゼミなど私物を保管できる場所があるかないか、学生数の違いからくるものと思われます。また各種のハラスメント問題を聞いた【入学後に感じた体験】では、8割以上の学生が「感じたことはない」と答えているものの、「パワーハラスメント」8.8%、「アカデミックハラスメント」5.0%、「セクシャルハラスメント」3.6%と、何らかの問題を感じた学生がいることがわかりました。こうした不快な思いを学生がひとりで抱え込まないように、今後もケア体制を充実させていく必要があります。

［育児・保育に関するサポート、サービス］については、実質的に利用者が少なく、95%以上の学生が無回答でしたが、サポートに関して若干名のニーズがあることがわかりました。

［施設の現状について］を聞いた質問では、学部生、大学院生共に多くの学生が利用する施設において「満足」「まあ満足」との答えが得られました（「図書館」82.4%、「情報教育棟」52.2%、「学内食堂」40.3%、「院生研究室」48.2%等）。しかし一方で「やや不満」「不満」が多かった施設（「学内食堂」39.0%、「学生会館、部室等」26.4%、「院生研究室」25.6%等）もありましたので、施設の現状に関しても、見直すべき点があると思われます。

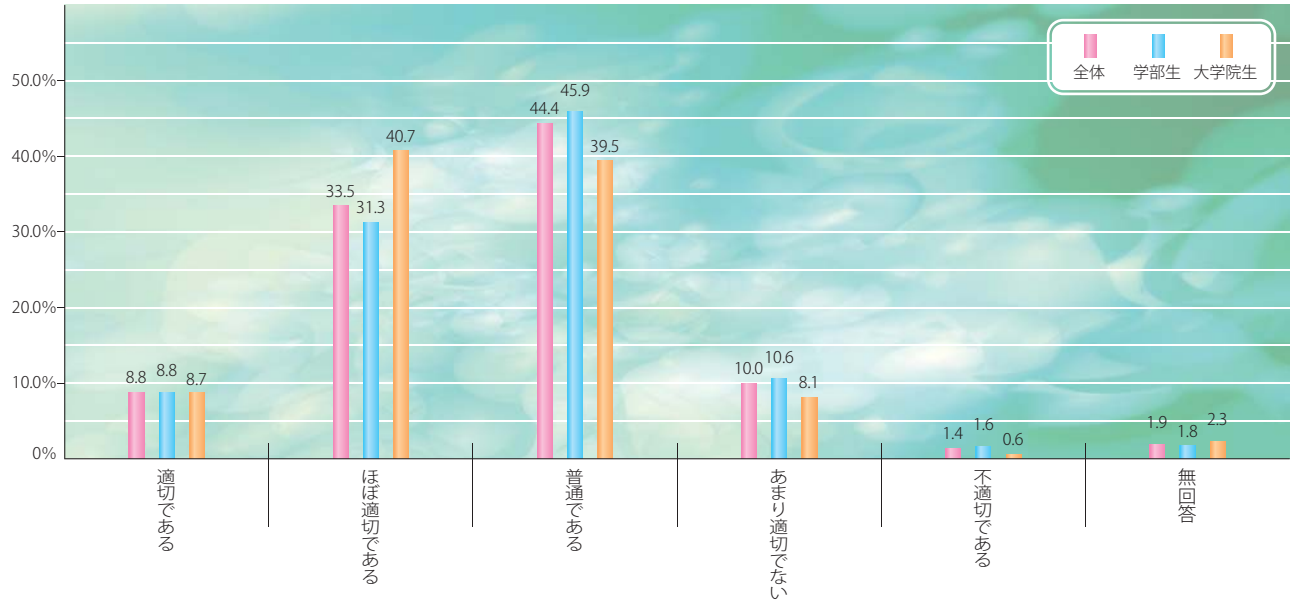
また、「施設・設備の充実・整備が早急に必要と思われるもの」を聞いた質問では、多くの学生が「くつろげるスペース」（41.7%）と答えています。2位は「学内食堂」の33.7%、次に「情報教育棟」31.4%、「図書館」22.4%と続きました。やはり学生にとっては学内において授業を除く時間を快適に過ごせる場所が必須であることがわかります。

Ⅻ. 大学への要望について

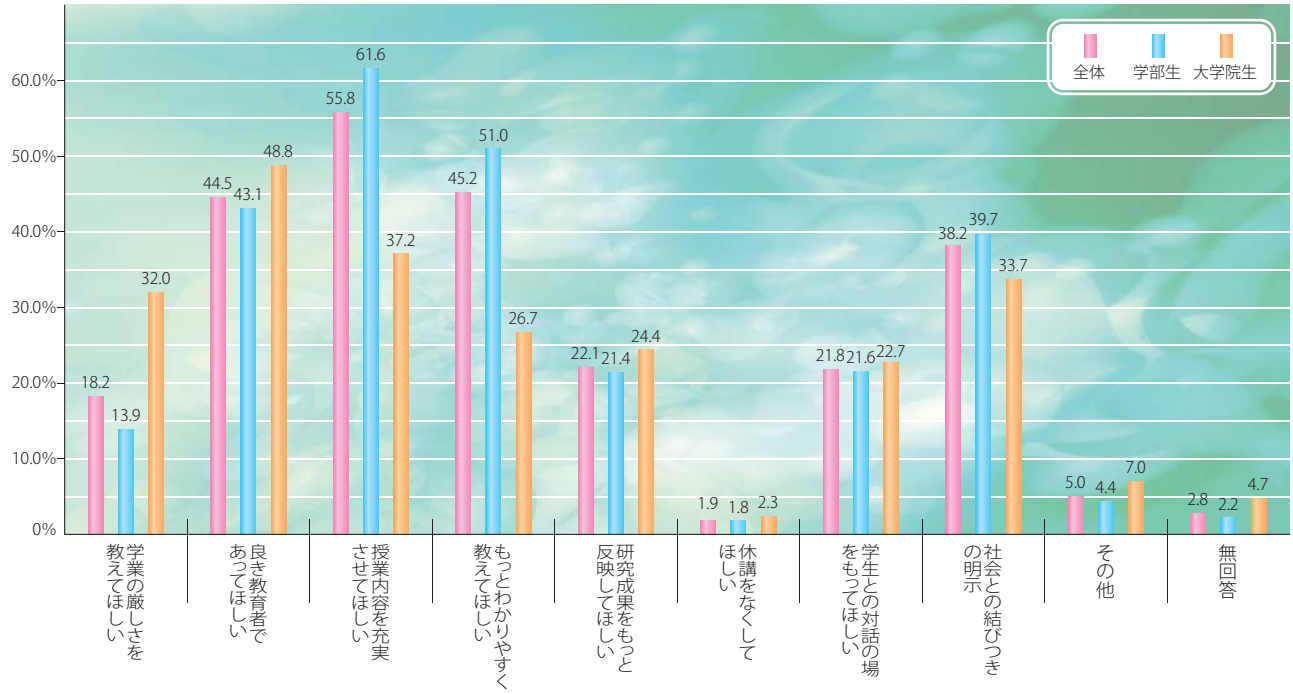
「学生支援全体の総合評価」を聞いた質問では、回答学生の42.3%が「適切である」「ほぼ適切である」と答えています（前回調査では44.3%）[図表 Ⅻ-1]。学部生だけを見ると40.1%ですが、大学院生はほぼ半数（49.4%）の学生が「適切である」「ほぼ適切である」と答えており、学生支援は大学院生にある程度評価されていることがわかりました。

一方で「あまり適切でない」「適切でない」と答えた学生も11.4%おり、前回調査の10.8%から若干ではありますが増えています。【Ⅸ.経済支援について／P.20、21】や、今回新たに調査項目を改編した【Ⅺ.生活支援について／P.24、25】で得られた回答もあわせ、学生支援全体をあまり評価しない学生が約1割いることを真摯に受け止め、これからも学生支援の一層の改善と拡充を図る必要があります。

図表Ⅻ-1　学生支援全体の総合評価（全体・学部生・大学院生）



図表Ⅻ-2　教員に期待すること／該当するもの3つ（全体・学部生・大学院生）

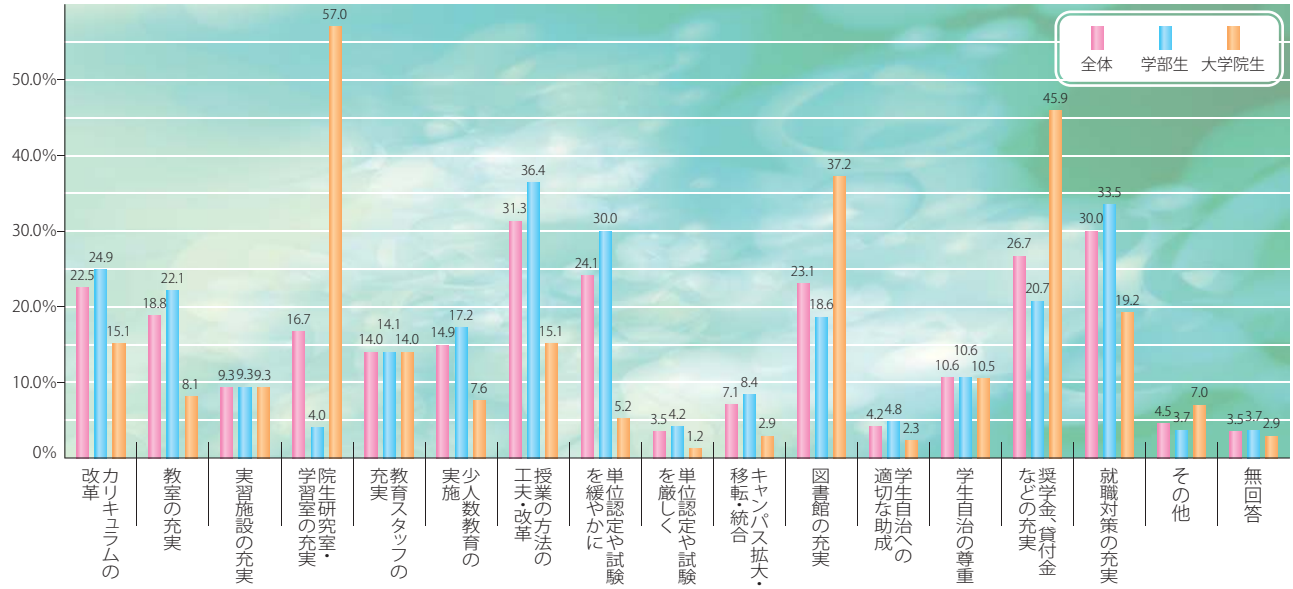


［教員に期待すること／該当するもの3つ］を聞いた質問では、前回の調査とほぼ同様の比率の結果が得られました［図表Ⅻ-2］。学部生は「授業内容を充実させてほしい」がもっとも多く61.6%、次に「もっとわかりやすく教えてほしい」51.0%、「良き教育者であってほしい」43.1%で、この順は前回調査と同様です。大学院生では前回同様「良き教育者であってほしい」が48.8%ともっとも多く、次に「授業内容を充実させてほしい」37.2%で前回同様ですが、今回の調査では次に「社会との結びつきの明示」33.7%、「学問の厳しさを教えてほしい」32.0%と3位と4位が逆転しました。また、「もっとわかりやすく教えてほしい」と答えた大学院生が前回の16.2%から26.7%と大きく増えたことが、前回の調査と今回の調査の一番大きな変化でした。

［大学に特に要望したいことや期待すること］では、学部生と大学院生で若干の違いがありました［図表 Ⅻ-3］。学部生で回答比率が高かったのは「単位認定や試験を緩やかに」「授業の方法の工夫・改革」「就職対策の充実」「教室の充実」などで、大学院生で高かったのは「院生研究室・学習室の充実」「奨学金、貸付金などの充実」「図書館の充実」などでした。

前回調査と比べて、学部生では「就職対策の充実」（前回23.7%→今回33.5%）「奨学金、貸付金などの充実」（前回15.2%→今回20.7%）などが増えています。これは現在の社会情勢を反映したものと言えるかもしれません。

図表Ⅻ-3　大学に特に要望したいことや期待すること／該当するもの3つ（全体・学部生・大学院生）



また、今回の調査では回収率が前回調査（平成19年度）の回答率２３.３%（全体）２１.３%（学部生）、２８.８%（大学院生）から12.8%（全体）13.2%（学部生）、11.7%（大学院生）と大幅に落ち込みました。

回答学生に自由な意見を聞いた「本調査に対する意見」では、前回までと同様に調査の意義と必要性に関しては一定の理解が得られているものの、調査そのものについては「質問が多い」「書くのが面倒」「Webやメールを使った調査にした方が回収率が高いのでは」「調査に答えるのが真面目な学生ばかりになってしまうので、調査結果にも偏りがあるのでは」などの意見があがっています。

回収率が低ければ調査結果のデータも信頼性が低くなってしまいますので、質問項目や量、調査自体のやり方など、今一度検討し、今後の対応を考えていかなければなりません。

XIII．学生の声

学生生活実態調査では「一橋大学の良さ」「一橋大学に言いたいこと」「本調査に対する意見」に関して、学生から自由な意見を聞いています。自由記述ですのでグラフデータとして表すことはできませんが、貴重な意見も得られていますので、ここに簡単に紹介します。

一橋大学の良さ

全体的に、自然環境や地域環境、学部間の垣根の低さ、少人数による学内の雰囲気、先輩とのつながり、学生の自主性が尊重されている点、などをあげた学生が多く見受けられました。その半面、「学びたいことが見つからない学生にはぬるま湯になってしまう」など、学生自身に対する厳しい意見もありました。

【学部生】

- 小規模のため学生同士のつながりが深まりやすい。
- 学生自治が尊重されている。キャンパス外観の美しさ。教員の質の高さ。
- 自然が豊かなところ。図書館が遅くまで開館していること。
- 学生数が少ないこと。他学部の授業も受けやすいこと。キャンパスの美しさ。
- 少人数のため、OB・OG との繋がりが強いこと。
- 学部間の垣根が低く、他学部生との交流や、他学部の授業の履修が盛んな点。
- エリートでありながら反体制の気概を受け継いでいるところ。歴史を感じさせる重厚で調和のとれたキャンパス。開放的で地域と密接なつながりのあるところ。郊外で勉学に適した静かな落ち付いた立地。各分野最前先の教授。親切なスタッフ。（とくに教務課、学生支援課によくお世話になってます）
- 留学体制が充実している。
- 自由な校風、気質。如水会をはじめとした先輩（OB・OG）、後輩のつながりの深さ。母校愛にあふれた学生、OB・OG。
- 自分の学びたいことを、自分で選択して、専門の先生方との個人的な交流を通じて学べる点。このことは逆に、学びたいことを持たぬ多くの学生たちを怠慢へと導くことにもつながっている。
- 教員と対話する機会に富む。ゼミナールが充実していて、前期課程のころから様々な議論に参加できる。シンポジウムが刺激的である。基本的にエレベーターが配備されている。学生支援課へのアクセスが容易。学長に要望を出す窓口もある。副学長クラスの人も学生の状況をよく把握しようとしてくれる。事務職員が積極的に連絡をくれる。

【大学院生】

- アカデミックなところと、研究や勉強に適した雰囲気があることです。教員が非常に優秀で尊敬できるところです。
- あまり権威的でないにもかかわらず、研究や教育レベルで一定の水準を保っているところ。
- 議論できる雰囲気。
- 大学の雰囲気がよく、学生に、特に外国人留学生に対する配慮がいい。指導教員の研究態度、姿勢が良い。
- 建物、キャンパスの雰囲気。
- 自主性の尊重、頼れば助けてもらえる。
- 留学生への支援はいろいろあって、すごく感謝しています。
- レベルの高い研究・教育。優秀な教員と学生。先輩方の活躍。
- 三者構成自治の伝統。
- 少人数教育で教員とのコミュニケーションが緊密なこと。
- 社会科学の伝統。院生間の横のつながり。自分達で問題を解決する「自治」の考え。
- 少人数教育によって、教員－学生、学生－学生間のつながりが、密であること。学部間の壁が低いこと。就職活動に際して、ＯＢとの距離が近いこと。

一橋大学に言いたいこと

圧倒的に多かったのは施設の老朽化に対する不満です。さらに食堂（混雑や価格）、図書館（開館時間）などについての要望も多く見受けられました。その他、学生支援の拡充や、HP の充実に対する要望もありました。一方で、一橋大学への愛校心を書いてくれた学生も少なくありません。

【学部生】

- もう少し就活支援に力を入れてほしい。如水会を通じたＯＢ訪問などが気軽にできるようにならないでしょうか。
- 生協はきれいで品ぞろえもいいのだが、食堂の行列緩和のためにレジを増やすなどもう少し効率的にできないかと思う。
- 図書館や東の建物のトイレにウォシュレットが欲しい。休日の図書館の開館時間を延長してほしい。
- 各種施設でのサービスや、大学で実施しているイベント・企画（留学プログラムや講演会等）の情報を手に入れるきっかけが少ない。ポスター掲示だけでは見落としてしまう。他の何らかの手段（メルマガ etc.）で、もっと知らせる努力をしてほしい。
- ホームページを充実してほしい。大学のサーバーが駄目になると各先生方のホームページにアクセス出来なくなる場合がある。
- 浪人してでも入学できてよかった。２年弱一橋生として過ごしてきて、より一橋を好きになった。
- 支援策についての認知が低いと思うので、もっと宣伝活動をする必要があると思う。
- メンタルヘルスや学業等について、学生への働きかけをもっと強くしてほしい。

【大学院生】

- 就職のサポートを増やしてほしいです。特に一橋大生限定の就職枠を作ってほしいです。食堂のメニューを改善しておいしく且健康的なメニューにしてほしいです。
- 図書システム、他大学や学外の資料（外国の資料を含む）を無料で借りたり、コピーできたらと思う。外国人留学生、国費留学生向けの寮を増やしてほしい。
- 情報教育棟は閉館時間も早く、休みも多いので利用しづらいです。図書館くらい開けてほしい。
- もっとゼミ室を作って欲しい。
- 今後ますますの大学の発展を祈っています。

学生生活実態調査についての意見

多かったのは、手書きで回答するにしては量が多く面倒という意見。一方で Web で行えばもっと回収率があがるのでは、などの建設的な意見や、調査の意義に同調する意見なども多数ありました。

【学部生】

- 設問が多い。ちょっと面倒に感じた。
- 調査結果をきちんと学校（大学）運営に反映して下さい。
- Web で行なえば、安く、集計も楽では？ホームページにリンクバナーを貼るなど、結果をより明確に発表してほしい。
- 一橋大学がよりよいものへと変わってゆくきっかけとなることを期待しています。

【大学院生】

- 学部生、院生、専門職院生では全く生活が違う。それぞれに分けて質問を作った方が良い。いくつかの質問が的外れに感じた。
- 家庭の状況や生活費などは答えにくいし答えたくなかった。
- どこまで調査結果が反映されているのか、非常に不明確です。

※ここにあげたのは回答のほんの一部です。他にも具体的に詳しく意見を述べてくれた学生がいましたが、誌面の都合上、全ての意見を掲載することはできませんでした。調査を理解し意見をくださった学生に改めて感謝致します。こうした学生の意見が少しでも反映されるよう、努力して参ります。

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

平成21年度　一橋大学学生生活実態調査報告書

平成22年12月発行

編集　一橋大学学生委員会
委 員 長　落合　一泰（理事 教育・学生担当副学長）
副委員長　安川　　一（役員補佐 学生担当）
委　　員　荒井　　耕（商学部・商学研究科）
石倉　雅男（経済学部・経済学研究科）
葛野　尋之（法学部・法学研究科）
中島　由美（社会学部・社会学研究科）
西谷　まり（国際教育センター）
中島　正雄（学生支援センター・学生相談室）

発行　一橋大学学務部学生支援課
〒186-8601　国立市中２－１